
ハレルヤ！ 魔法が消える日 訣別

宇田川城重

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハレルヤ！ 魔法が消える日 訣別

【Nコード】

N4446K

【作者名】

宇田川城重

【あらすじ】

ある日突然、ハルケギニアから魔法が消えた。メイジは力を失った。貴族は権力を失った。平民は自由を得た。だが、その結果生まれたものは……！？ルイズは、そして才人はどうなるのか？

unhappy endバージョン（18禁）は、『ハレルヤ！魔法が消える日 崩壊』まさかはないわよね』で検索して下さい

61

(1) 異変(前書き)

初めに……

この作品は、『ハレルヤ! 魔法が消える日』の、happy endバージョンです。

unhappyでは人が多数死んでいましたが、こちらは、極力人が死なない話にします。

ただし、貴族にとっては死ぬよりの屈辱となることでしょう。

ルイズには、死ぬくらいの苦痛と屈辱にあってもらいます。

それを乗り越えて、happy end……です。

それが嫌いだと言う方は、読むのをお控えになることをおすすめします。

ここでは、当然のことながらHなしです。

unhappyバージョンと一部重複する部分がありますことをご了承ください。

(1) 異変

それは、我々が住まう世界とは別の世界のことである。

ハルケギニアの国々の一つ、トリステイン王国。

美しく整備された都、トリスタニアは花に彩られ、人々が幸福の中に一年中飽くことを知らず、

平和に満ちあふれた国……は、見かけ倒しの偽りであった。

現実……神より授かりしものと信じて疑わぬ力、『魔法』を使う能力を持つ者、『貴族』。

それを持たざる者、『平民』。

貴族は平民を、魔法という暴力装置によって支配し、抑圧し、搾取する社会。

威を誇り、平民のわずかな富を奪い取り、酒食に耽りて自らは励ま
ず。

平民は諦観と絶望にくれるのみ。貴族への憎悪はあれど、抵抗する
手段はない。

それが数百年、数千年、永遠に続くものと誰もが信じていた。

あの出来事は、ほんのわずかな心の隙をついたものだったのかも知
れない……。

二つの月が朱に染まった。

天空の星々が位置に乱れを生じ始めた。

「異変が来るぞ！」

「我らには大きな喪失が待っている！」

「大いなる不幸が襲う！」

予言者たちの、異変の到来を叫ぶ声が、貴族たちの闊歩する通りに
響きわたった。

しかし、貴族たちはそんな予言を嘲った。月や星の異常など、すぐ
おさまると信じていた。

だが、そんな楽観はすぐに消えることになる。
それから間もなく、温暖であったトリステインの気候が崩れ出したのだ。

貴族が平民から奪い取るための稔りをもたらし続けた太陽は分厚い雲の向こうに隠れた。

季節外れの北風が大地に吹き付け、草花を枯らしていった。

誰もが経験したことの無い、深刻な凶作がトリステインを襲った。だが貴族は容赦せず、搾取を続けた。平民の命綱となる作物を奪い取った。

それは豊作、不作に関わらず、収穫の時期のいつものことであった。

だが……。

都の郊外の農村にて、それは始まった。

「まだ隠しているだろう！ さあ、作物を出せ！！」

「お願いします、これ以上お渡ししては、我々は飢えてしまいます」

「うるさい！！ 出せと言ったら出せ！」

小作人の平民と地主の貴族の押し問答が起きていた。

「父ちゃんをいじめんな！」

「うわっ！」

突然、横から飛び出してきた少年の体当たりを受けて地主の貴族は倒れた。

「お、おい、地主様になんてことをするんだ！ 謝れ！」

「やだ！ こいつなんか貴族じゃない、泥棒だ！」

少年は毅然と言う。

「く、くそっ、このガキ……少し痛い目に合わせてやる！」

「お、お許しを！ 良く言っただけ聞かせますから」

「うるさい！ もう許さん、食らえ！！」

火の魔法の使い手を自称する貴族は、魔法の詠唱を始めた。

「うわっ！ や、やめ……！」

魔法が放たれた……はすが、何も起きない。

「？」

平民の親子の衣服には、焦げ目一つついていない。

「な、なんだ！？ 一体どうしたのだ！？ こんなはずは……」

使い慣れているはずの魔法が、全く発動されない。

焦って詠唱を繰り返す貴族だが、火はおろか、煙一つ上がらない。

これには平民の親子も啞然とするばかりだ。何が起きたのだ？

ともかくこれは、形勢逆転のチャンスだ。

「食らえつ、野郎ーっ！！」

平民の父親は必死に詠唱し続ける貴族の顔目がけて、大きめの石を投げつけた。

「ぎゃああああーっ！！」

石が額に命中した貴族は地面をのたうち回った。

「今だ、やつちまえー！！」

物陰から一部始終を見ていた平民たちが飛び出してきて、一斉に袋叩きにかかった。平民の親子も一緒だ。

「わ、悪かった、やめてくれ！！ 謝るからやめてくれ！！」

貴族は命乞いを始めた。

「奪った作物を返すか？」

「返す。返すから、許してくれ」

平民たちは手と足を止めた。

「やったぞ！ 貴族を謝らせた！！」

「我々の勝利だ！」

平民たちは歓喜の声を上げる。

「今後一切、我々を苦しめないと誓うか！」

「……はい」

「誓いません」

その不敵な声に振り向くと、そこには、5、6人ばかり、貴族の一家が集まっていた。

「あ、あなたー！！」

貴族の妻は、ボロボロにされた夫に泣きつく。

「よ、よくも……平民風情で……」

続いて、憤怒の表情を平民へと向けた。平民たちは思わず後ずさる。

続いて息子たちが、

「言っておくが、これは私怨による復讐ではない。偉大なるメイジたる貴族に逆らった処罰だ」

「さあ、覚悟しろ。今度はアリにでも生まれてくるんだな」

だが、一生に一度、貴族「メイジ」に一矢報いることができただけでも……平民たちの素直な思いだった。

だが……。

「ば、バカな!？」

「魔法が……魔法が!？」

先程の地主と同じことが起きた。

間違いなく詠唱したはずの魔法が全く発動されないのだ。

そうと決まれば!

「うおおおおおーっ!!」

多勢に無勢、あつという間に貴族たちは倒された。

誰が持ち出したか、出刃包丁を突きつけられた貴族たちは必死に命乞いをする。

「た、頼む、命だけは!! さっきの言葉は撤回する、作物も返す、だから……」

先程と、完全に立場が逆転していた。

「ではまず、奪った作物を全部返してもらおう」

降参した貴族たちは、包丁を背中に突きつけられたまま屋敷へと歩かされた。

この村だけではなかった。

同じ出来事が、トリスティン全土で起きていた。

ある村では一揆に発展し、貴族の屋敷が襲われた。

「魔法が使えない！」と狼狽した貴族たちは、あっという間に昨日まで虫ケラ扱いしていた

平民に敗れ去った。

あの月や星の乱れが、これから始まる貴族「メイジ」の葬式を告げる鐘だったのだ。

(2) 解放

5日を待たずして、トリステイン王国内での平民の反乱は、ゲルマニア、ガリア、アルビオン、ロマリア……近隣諸国へと波及していた。

もちろん、王族や貴族は手をこまねいていたわけではない。軍、治安部隊、傭兵部隊を動員して鎮圧に当たろうとした。だが、予想外のことが起こった。

「軍は民とともにあり！」と、平民側に部隊単位で次々と寝返り始めたのだ。

平民と和解、団結した蜂起軍の戦力は、自分たちでも把握できないほど大きく膨れ上がっていた。

王家側に残った軍は、ほとんどが武器の扱いで劣る元メイジだった。牙を抜かれた虎など、子猫も同然。このまま蜂起軍と戦ったところで、勝利は望めない。

衝突こそ起きていないが、いつ戦いが始まってもおおかしくない膠着状態がしばらく続いた。

やがて蜂起軍『ハルケギニア救国連合トリステイン支部』の使者を名乗る女……かつてのトリステイン王国軍の銃士隊長だった女、アニエスが、トリステインを統治する女王アンリエッタの居城を訪れ、「女王陛下に謁見したい」と要求した。

あれだけアンリエッタに忠誠を誓っていたアニエスが、こつとも簡単に蜂起軍に寝返るとは、誰もが目を疑った。

称号を与えられて貴族となったとはいえ、元は平民。平民としての感情は消えていなかったのだ。

「よくもぬけぬけと……裏切り者め、許さんぞ！」

衛士の一人が剣に手を掛けた。

「お待ちなさい。せつかくの話し合いの機会を無駄にはいきません」

アンリエツタはなだめた後、ア二エスに顔を向けた。

「お話をうかがいましょう。講和会談をされたいのでしょうか。それとも、降伏勧告でしょうか」

「……両方ですね。こちらの要求を受け入れて頂きたく存じます」
ア二エスは、油断なく目をあたりに這わせながら、声高らかに書状を読み上げた。

曰く……。

一つ、貴族制度を廃止し、すべての特権を没収すること。

二つ、法廷を開き、平民を殺傷した貴族、権力の乱用により平民を苦しめた貴族を公正な裁判にかけること。

三つ、貴族は所有する農地を、領地内の平民に公平に分配する形で明け渡すこと。

四つ、身分に関わらず、政治に参加できる機会を全ての国民に与えること。

「……以上でございます」

謁見の間は、重苦しい沈黙に包まれた。完全に降伏勧告だ。受け入れられない場合は、宣戦布告となるのは、誰の目にも明らかだ。

「我々としても、無益な争いは望んでおりません。流血の事態は、極力避けたいと存じます」

「……わかりました。では、少しお時間を頂けませんか？ 私の独断では決めかねますので」

「結構でございます。討議を重ねられた上で、結論をお出し下さい。受け入れて下さるのなら、城の塔に白い布を掲げて下さいませ」
会談は終わり、ア二エスは出て行った。

「このようなふざけ果てた要求、断じて吞めませぬ！」

「叛徒に加わった裏切り者どもは絶対に許せませぬ。断固として戦いましょうぞ！」

「徹底抗戦あるのみです！」
重臣たちが口々に叫んだ。

貴族制度を廃止しろ？ 冗談ではない。そんなことをすれば、平民

どもが何をするかは知れたものだ。

自分の首が、文字通り飛ぶかどうかの瀬戸際なのだ。

「お黙りなさい!!!」

アンリエッタの大声に、協議の間は静まり返る。

「あなたたちは、自分のことしか考えていないのですか! わかっています。平民の報復を恐れてらっしゃるのですね。では、仮に戦ったところで、勝てまして? 王国軍の兵士だった者も多数加わっております。この城、都、いやトリステインの隅から隅まで知り尽くしているのです。地の利、数の利、全て向こうが上回っているのです。アルビオンとの戦いとはわけが違います。それでも戦いますか? 負けるとわかっていながら」

「……おっしゃることは承知致しました。我々に、死ぬとおっしゃるのですな。それが、陛下のやり方というものでございますか」
宰相である枢機卿マザリーニは、皮肉を込めて言った。

「……いいえ。首を捨てるのは私です。皆様方のご助命を願う代わりに、この身を蜂起軍に差し出します」

重臣たちはどよめいた。その決意に満ちた瞳に、誰もが言葉を返すことができなかった。

「……勅令を出します。要求を全て受け入れ、貴族制度は廃止すると。そして、平民……だった民を説得に当たります。貴族への復讐をやめさせるために。生活の保障、謝罪を要求されれば、私は一切拒みません。さあ、白い布を掲げましょう」

「……はっ」

マザリーニは、力のない返事をした。

城の塔に白い布が翻った。

城を取り囲んでいた蜂起軍から、嵐のような歓喜の声上がる。

王家の降伏により、無血革命が成就した。

「解放万歳！！」

「自由に万歳！！」

「女王陛下のご英断に万歳！！」

万歳の声は、いつまでも消えることはなかった。

ゲルマニア、ガリア、アルビオン、ロマリアの城にも、白い布が翻った。

ハルケギニア全土はは歡喜に満ちた。平民たちは街に繰り出し、万歳を叫んで回った。

いつの間にか、太陽をずっと隠していた厚い雲が消えていた。太陽が再び姿を現した。

その夜、朱に染まっていた二つの月が、元の色に戻っていた。空の星々の位置が、元に戻っていた。

しかし、魔法が復活することはなかった。元メイジⅡ元貴族たちの、逆襲に打って出るためのかすかな希望は完全に潰えた。

ハルケギニアのメイジ、すなわち貴族、ここに滅す。

勅令はトリステイン全土に発布され、ただちに施行された。

勅令が出た翌朝、トリステイン魔法学院。

シエスタは、洗濯物を持ったままあわてて廊下を駆けていた。

「おはよつす」

「あ、おはようございます、才人さん」

「どうしたんだよ、そんなにあわてて」

「寝坊しちゃいまして、お洗濯の……」

「ははは！ なーに言っただよ」

笑い出した才人に、シエスタは啞然とする。

「もう貴族の言うことなんか聞かなくていいんだよ。貴族制度が廃止されたの、忘れたのか？ つまり貴族はもうだめになっちまったんだから」

「あ、そういえば……」

条件反射で仕事に出ていて、すっかり勅令のことを忘れていた。

「もう仕事してる奴なんか一人もないよ。俺たちも、遊ぼうぜ！」

「……ええ、遊びましょう！ お仕事、やーめっ！」

シエスタはうれしそうに洗濯物を廊下に放り投げた。

「おう、そうこなくっちゃ！ よーし、行こう！」

「行きましょう！」

才人とシエスタは一緒に庭に出た。

「シエスター！ 才人さーん！ 遊びましょー！」

庭ではメイドやコック、学院の使用人たちがボール遊びをしていた。

「はーい！」

「よーし、行くぞー！」

二人はみんなの輪に加わった。

「ほら、行つたぞ！ そつちそつち！」

「きゃー、強過ぎ！」

「あーん、取れなーい！」

「あははは！」

使用人たちの明るい笑い声が、学院の庭に響いた。

シエスタも、才人も、この学院に来てから、こんなに楽しい思いを

したのは、初めてのことだった。

貴族の横暴から解放された喜びを、深く感じていた。

夢にも思わなかった、自由の日が来たのだ。

(3) 失墜

自由の日……魔法が消えた日。

系統魔法が消え、トリステイン魔法学院に召喚された使い魔たちは煙のごとく消えた。

残ったのは、人間である才人だけだった。

先住魔法はまだ残っているが、徐々に魔力は薄れ、消えかけている。もう使える者がいないのは系統魔法と同じだった。

ハルケギニアにおける魔法は、静かに息を引き取るうとしていた。

エルフ、巫人は力を失い、「ただの人」になった。

人間からの報復を恐れたか、いずこともなく身を隠した。

浮遊大陸であるアルビオンは海面に向けて徐々に降下を始めていた。一気に落下しないのは、まだ大陸を浮遊させる先住魔法が残っているからだ。

もし、先住魔法まで一気に消えていたら、アルビオンは急激に落下して滅亡、さらに大津波がハルケギニア沿岸を襲い、壊滅的被害となっていたことだろう。

貴族の横暴から解放された途端に大災害が襲っては、新たな不幸の始まりだ。

魔法に頼るところが大きかった、産業はどうなっただろうか。

錬金はできなくなったが、鉄鉱石から製鉄をする技術は、すでに完成されていた。

メイジ殺しの傭兵に売る密造の武器を作る工程で、すでに高品質の鉄が作れるようになっていたのだ。

その技術は、あっという間にハルケギニア全土に広まっていくことになる。

武器を始めとした、鉄製品を魔法なしで作れる。ハルケギニアにおける、産業革命の萌芽であった。

だが、それら産業革命が達成されることになるのは、まだ先のこと

である。

現状は、魔法がなくなり、人々は不便な状態を強いられることになった。

風石がただの石ころとなり、空を飛ぶ『フネ』は海を行くただの『船』となった。

もつとも、フネを始めとした魔法の恩恵はほとんど貴族のものだったのだから、平民にとっては大して不便ではないのだが。

恩恵に預かれる者がいたとすれば、ほんのわずかの、平民の船長や船員だけだ。ほとんどの平民がただ下から見上げているだけだったフネは、もう飛ばない。

今まであったものがなくなったら、今あるもので何とかする、いやしなければならぬ。

人間は工夫するもの。そうしなければ生きられないからだ。

フネに変わる新しい乗り物が生まれる日も、そう遠くはないかも知れない。

そして風に頼らずに海に行く船、馬より速く陸を走るもの、そして空を飛ぶ新しいものが……。

話を戻して、トリステイン魔法学院。

勅令が出た日から、学院としての機能は完全にストップしていた。

メイジが消えた世界での魔法学院などナンセンス、授業は全て休みとなった。

教師たちはやる気を失い、生徒たちは部屋に閉じこもりがちになった。

使用人は、自分のこと以外の仕事は一切しなくなった。

用事を言いつけようものなら、

「ご自分でどうぞ」

「チップはいくら下さるんですの？」

小バカにした態度で断られる。貴族の権威は完全に失墜した。夕食の時間になった。

『元貴族入るべからず 入ったら殺す!! マルトー』
食堂の入り口に、殴り書きの張り紙がされていた。

「あの元クズ貴族のバカ息子、バカ娘どもに食わす無駄な飯はない！」

「そつだー！」

マルトーの言葉に、一同が賛同の声を上げる。

「食べ物を粗末にした罰が当たったと思つて、しばらく腹ペコの苦しさを味わってもらつとするか！」

「そつだそつだー！」

「それでは、自由と解放に乾杯！」

「かんぱーい!!！」

メイド、コックなど使用人たちはいつせいにグラスを上げた。才人も一緒だ。

才人は『例外』で仲間に入れてもらえた。

自分たちのためだけに作つた食事の味は、格別だった。

貴族は出された食事の大部分は残す、気に入らないとまずいと文句を付ける。何が悲しくて、あんな奴らの無駄飯を作らなければならぬのだ。

残飯を捨てる時、どんな気持ちかわかるのか。

でも、貴族はもうだめになった。もう貴族の食事など作らなくてもいいのだ。自分たちの分だけを作ればいいのだ。

「この食堂、レストランにして、元平民は無料で食べ放題、元貴族はスープ一杯につき100エキューってのはどうかな？」

「いいねー！」

「ナイスボツタクリ！」

「はははははー!!！」

楽しい夕食の時間はあっという間に過ぎた。

後片付けを終えた後、才人が食事を乗せた盆を持っているのを、マ

ルトーは目ざとく見つけた。

「それ、今日の残りもんじゃないか。持ってってやるのか、『元』ご主人様に」

「ええ、『元』ご主人様にね」

「優しいねえ、サイトは」

「いやいや、飢え死にされちゃ寝覚め悪いでしょ。まあ、元主人の惨めな姿を見るのも一興ということで」

才人の言葉に、周囲の人間はどつと笑った。

才人はルイズの部屋に戻った。

「食えよ。残り物だけど、晩飯だぞ」

パンとスープの残り、それにおかずが2品だ。

しかし、ルイズは体育座りの体勢でベッドの上に座ったまま、動こうとしない。

「朝からろくに食ってないんだろ？ もう意地を張るな」

返事はない。

目は虚ろで、これまでの傲慢な雰囲気はどこにもない。

「いらないのか？ じゃあ捨てるぞ」

「……食べるわよ」

さすがに空腹には勝てず、ルイズは食前の儀式も忘れ、食事をあつという間に平らげてしまった。

「ごちそうさま……それから……ありがとうって言っとくわよ」

「どういたしまして。……ん、何か言いたそうな顔だな。言ってみるよ」

顔色を読まれ、ルイズは少しためらったが、

「じゃあ言うけど、主人にこれくらいのことをするのは当然……」

「女王陛下の勅令により、あなたは貴族ではなくなりました。ゆえに、あなたは私、平賀才人の主人ではなくなりました」

慇懃無礼にバツサリ切り捨てた才人を、ルイズは苦虫を噛み潰した表情で睨みつけた。

「言つとくけど、俺に怒っても無駄だ。俺が決めたことじゃないんだから」

才人は臆することなく、平然と云つてのける。

「……私たちはもう貴族じゃないって!? 冗談じゃないわよ!

これからどうすりゃいいのよ!」

ルイズはとうとう大声を上げた。

「じゃあ、アンリエツタ様に何とかして下さいって直訴してくれば? 友達のよしみって奴で」

「直訴!? 今トリスタニアにのこのこ出かけてみなさいよ、平民どもにどんな目に合わされるか」

「そいつは仕方ないな、自業自得ってもんだ」

「な……私が、私が何を……」

「したつて言うんだ、つて? 俺にしたことで、本が20冊くらい書けそうだよ。名付けて『使い魔虐待の報告書』。身に覚えあるだろ、忘れたとは言わせないぜ。犬扱い、奴隷扱いしたことを。そっちが忘れてもこっちは覚えてるんだよ」

「ぐっ……」

ルイズは言葉に詰まった。どれだけのことをしてきたのか、と言われれば返す言葉はない。

しばらく沈黙が続いたが、

「なんか言つたらどう……」

「何を言えばいいわけ?」

「どうせあんたも、貴族じゃなくなった、ざまあみろって喜んでるんでしょ!」

「俺はこれまでの、そして今ある事実を言っただけだ。それとも何か、今までのことは怒っていません、殴られたことも蹴られたことも一切気にしていません、全て水に流しますとでも言っただけだったのか」

「ああ、そう言っただけで欲しかったわね！」

ルイズは吠えかかる。

「あんたは元平民だからいいわよね。こっちは……使用人にまでバカにされて！ 『飯が食いたきや自分で作れ、作れないなら材料のまま食え』 って！！ 完全に権威ゼロよ！！ また『ゼロ』に逆戻りよ！！」

「お前だけじゃなくて、みんな同じだろ。ギーシュも、キュルケも、先生たちもみんな仲良く魔法ゼロ、権力ゼロになったんだろ？ みんなでゼロなら怖くない、ってか」

「なんですつてー！！」

「おっと」

乗馬用の鞭を握ったルイズの腕を、才人はあつという間にねじり上げていた。

「また鞭打ちか。お前も懲りない奴だ」

才人の恐ろしく冷静な声に、ルイズは冷や汗が吹き出して来るのを感じていた。

ルイズは鞭を取り落とした。

「そうだ、それでいい」

才人が手を離れたその隙を見逃さなかった。

「いいわけないでしょ！！」

すかさず股間を蹴り上げた。

「ぐあっ！！」

才人は床をのたうち回る。

「あんまり私のこと、なめないでくれる？ ……ぐうっ！！」

才人は痛さをこらえながら、ルイズのみぞおちに拳を突き入れている。

「あんまり俺のこと、なめないでくれるかな？ 何度もやられてりゃ、慣れっこになるってもんだよ」

痛みに耐えながら、才人は立ち上がる。たちまち、取っ組み合いのケンカが始まった。

掴み合つたまま、ルイズが殴る、才人も殴る。

「どうしてももう貴族じゃないことを認めないつもりか!!」

「当たり前よ!!」

果てしない殴り合い、蹴り合いが続く。

だが、所詮は男と女、力の違いは歴然だ。次第にルイズが押されてくる。

「何がお前をそうさせるのかは知らんが、現実から逃げてる時点でお前の負けだ!」

「うるさい!」

飛びかかってきたルイズを、

「大バカ野郎!!」

次の瞬間、才人は背負い投げで投げ飛ばしていた。

したたかに床に打ち付けられ、ルイズは動けない。

才人は自分が信じられなかった。理由はどうあれ、女に手を上げた。しかも、投げ飛ばすなんて。

悲しい暴力だった。

「殺してやる……殺してやる、殺してやる、殺してやる!!」

ルイズはフラフラと立ち上がると、机の上にあった剣を掴んで才人に向けた。

デルフリンガー、しゃべる魔剣……だった剣。

まるで魂が抜けたように、口をきくことはない、ただの剣になっていた。

それでも、人は殺せるだろう。

「殺せるもんなら殺してみろよ。明日にでもお前はお縄になって、牢屋に入れられて、最悪、死刑になるんだ。元公爵令嬢だからって無罪になると思つたら大間違いだぞ。それでもいいなら、さあ殺せよ、殺してみろ!!」

二人は対峙したまま、狂気が支配する重苦しい時間が流れる。

だが……。

次第に二人の顔から狂気が消えていく。

我に返った二人は、がっくりと肩を落として座り込んだ。

ルイズは剣を窓から投げ捨てた。

「……ちくしょう……どうして、どうしてなんだよ……お前は結局、俺のことを奴隷としか見てなかったのか。あれだけ一緒に命がけで戦ったのに」

あれだけ力を合わせて戦ってきたのに、一瞬にして信頼が崩れるとは。

才人の心は、失望にまみれた。

「お前だって、散々嫌ってきた悪徳貴族と何も変わらない。権力をかさに着ていばってるクス貴族そのものだよ」

「……」

ルイズはうなだれたまま、顔を上げようとしない。

「いいか、お前はもう、貴族でも、公爵令嬢でもないんだ。メイジでもないんだよ。今までの暮らしはできないんだ。いいかげん、わがまま暴君は廃業しろ」

「……わかってないわね、サイト。私は誇り高く生きたいのよ。ヴアリエール家の娘としての誇りを持って」

「誇り高く？ お前の言う誇りって、何なんだよ？ 平民相手にいばりくさることか？ 魔法の達人になって、バカにした奴らをぶっ飛ばしてやることか？ 違うだろ」

「……違うわよ。国のために一生懸命……」

「嘘だ。お前は自分のことしか考えてない。税金が払えない平民の代わりに、立て替えて払ってやったことが一度でもあるか」

「何で私がそんなことを」

「ほら見る、そうだろうと思ったよ。腹をすかした平民に、一切れのパンでも与えたことがあるか」

欺瞞を暴かれ、ルイズは返事ができない。

「おしやれに着飾ってパーティーもいいだろうさ。だが、その間にどれだけの平民がどれだけ大変な思いをしてたかわかるか！ 貴族のためにどれだけの女性が未亡人になったかわかるか！ どれだけ

の子供が孤児になったか!!」

「私のせいじゃないもん……私が悪いんじゃないもん……」
ルイズはたまらず泣き出す。

残酷なのはわかってる。才人も辛かった。これでいいのか、泣かせていいのかと逡巡する。

だが、ここは心を鬼にしても、自分たちがやってきたことを自覚させなくてはならない。

「泣くな!!」

迷いを押し殺し、才人は一喝した。

「だって、だって……」

「泣いても誰も助けしてくれないし、何も解決しないぞ」

「じゃあ、私に何ができるって言うのよ。もう魔法は使えないのよ！
！ 今までの努力が、全部パーよ！ それで、どうやって生きていけばいいのよ！」

「魔法はなくても、人間だから知恵がある。知恵があるからここま
で進歩してきたんだ。魔法の力だけじゃないんだ。知恵を絞って考
えれば、魔法のない世界でも生きていけるはずだ」

「何か方法でもあるの？」

「ないね」

ルイズは思わず脱力しかける。

「だから考えるんだ。考えるんだよ！ おい、お前生きていたくな
いのか？ もう死んじまいたいのか？」

「生きたいわよ……」

「だったらさ……考えようよ……貴族だったことは忘れるなんて、
無理なのはわかってる。それでも生きなくちゃいけないんだ。その
ためにも」

才人の説得に、ルイズの心にわずかな火が灯った。

(4) 閉校

ある朝のこと。

ノックもなしに、学院長室のドアが開いた。

「オールド・オスマン！」

集団がずかずか入ってきた。コルベールを始め、教師陣が勢揃いしていた。

「オールド・オスマン、学院が廃校になるというのは本当なんですか!？」

「よくもまあ、こんなバカ面ばかりがそろったもんじゃのう……」
椅子にふんぞり返ったまま、力のない声で言う学院長オスマンに、一同は一瞬啞然となる。

しかし、コルベールはひるまずに声を張り上げた。

「オールド・オスマン！ 真面目に答えて下さい！ 学院はなくなるんですか？」

「ああ、本当じゃよ。昨日、王政府からの使者が来てな。『トリステイン魔法学院は廃校となる』と通達を渡された。まあ、当然じゃろう。誰も魔法が使えない魔法学院なんて、あるだけ無駄だからな」

「ば、ばかな……そんな、それじゃ私たちはどうなるんですか？」

「全員解雇。やむをえん」

「生徒たちは!？」

「全員家に帰ってもらおう」

「そ、そんな……生徒たちはいいとして、私たちはどうすればいいんですか!？」

「どうするもこうするもないだろう。どこかの学校に勤めるなり、別の仕事を探すなり、好きなようになさい」

オスマンは他人事のように言った。

「そんな……魔法が使えないメイジなんて、どこが雇ってくれるというんですか……」

「わしに言ってもどうにもならん。わしは隠居させてもらおうとするかの。もう、ほとほと疲れた……わかつたら、下がりなさい。……せめて最後に、閉校式でもやるか」
それだけ言うと、もう精も根も尽き果てたかのように、オスマンは口をつぐんでしまった。
あの好々爺ぶりが嘘のような、肩を落とした後ろ姿は無惨なものであった。

廃校の知らせは生徒たちにすぐに伝わったが、それほど大きな騒ぎにはならなかった。

「ああ、来るときが来たか」とあっさりしたものだっただ。

魔法が使えなくなった時点で、いずれこうなることは心のどこかでわかっていたのかも知れない。

3日後、閉校式が執り行われた。

生徒も教師たちも、大部分が目はトロンとし、肩を落とした、まるで敗残兵のような体たらくになっていた。

教師たちは失業、生徒たちも、家に帰ったところで今までの贅沢三昧な暮らしは望めない。

こんな状態で放り出される。これでまともな状態でいられたら、むしろ異常だ。

だが、コックやメイドなどの使用人、そして才人だけが明るい顔だった。

「……では、続きまして、コック長のミスタ・マルトーよりご挨拶です……」

司会役のコルベールが、力のない声で言う。マルトーが壇上に上がった。

「よう、元貴族のドラ息子、バカ娘どもよ。どいつもこいつも、負け犬みたいな顔しやがって」

いきなりの嘲笑混じりの言葉に、誰も怒る者はいない。

怒ったところで、どうにもならないのだから。それ以前に、もう怒る気力もない。

「そりやそうだよな、魔法が使えないメイジ、それにもう貴族じゃないから、ただのガキだもんな。ずいぶんといじめてくれたけど、これでお別れだ。今更言うまでもないと思うけど、はっきり言わせてもらうよ。俺はお前らのことが大嫌いだよ。理由なんて言うまでもないだろ？ 本当に、食事に毒入れて、何度殺してやろうと思っただか知れない。でもお前らは自分でだめになった。まあ、今まで好き勝手放題やってきたツケが回ってきたんだな」

マルトーは穏やかな笑みで罵倒し続ける。

「俺たちの心配はいらない。食堂を、民間払い下げでレストランとして使わせてもらえることになった。使用人連中は、みんなそこで働くことになったから。いずれ開店するから、食えなくなったら来いよ、掃除や皿洗いくらいならさせてやるし、まかないの食事も出してやるからさ。俺、ついにオーナーシェフか……田舎のみんな、ぶったまげるぞ。あ、お前らには関係ないか。以上だ」

マルトーは満足げに壇を降りる。生徒たちの中には、惨めさと悔しさのあまり泣き出す者もいた。

閉校式が終わり、生徒たちは荷物をまとめ始めた。

暇になった才人は、学院内をぶらぶらしていた。

ルイズの帰り支度を邪魔しないよう、気遣ってやったのだ。

手伝おうかと思ったが、今自分がいても邪魔なだけだと思い、席を外すことにした。

「お、キュルケ。帰り支度は？」

同じようにぶらぶらしていたキュルケに出くわした。

「もう終わったわ。もう見納めだから……よく見ておこうと思ってキュルケはいつになく寂しげな目をしていた。

「キュルケ、これからどうする？」

「ゲルマニアに帰って……それから考えるわ。サイトは？」

「俺はここで働くよ。ここで雇ってもらえることになったからさ」

「ふーん。それにしても、ルイズはどうなるのかしら？」

「ルイズ？ 元公爵令嬢で、今でも十分金持ちなんだから、それなりにやっていくんじゃないか？」

キュルケと別れて部屋に戻ると、ルイズが荷物をまとめ終えたところだった。

「もう、行くのか？」

「明日、出るわ」

気の入っていない声でルイズが言う。

「そうか。これでお別れだけど、まあ、しっかりやれよ」

「……」

少しの沈黙を置いて、ルイズがつぶやいた。

「……そういえば、あんたのそのルーン、まだ消えてないのね」

「ん？ そういえば……」

左手にある使い魔のルーン、ガンダールヴのルーンがまだ消えずに残っていることをすっかり忘れていた。

「なぜだ？ もう魔法はないはずなのに」

才人にも理由がわからず、首をひねるしかなかった。

「まあ、俺メイジじゃないし、関係ないか」

「それよりサイト、もうこれで元の世界に帰れる道は完全に断たれたのよ。辛くないの？」

「俺？ 今更ジタバタしたってどうにもならねえだろ。ここに根を下ろして生きてくしかないじゃないか」

「……気の毒したわね、サイト」

ルイズからの謝罪の言葉に、才人は驚いた。

「どうしたんだよ、いきなり」

「こっちの勝手な都合で呼び出して、その上、もう帰れなくしちゃって……」

「魔法が消えたのはお前のせいじゃないだろ。それよりお前、これから大変だな」

「うづん、これでいいのよ。ものは考えようよ。もうみんな魔法が使えないから『ゼロ』と呼ばれることもないし、貴族の誇りなんて下らないものに縛られなくていいんだし」
聞き直ったように笑って言うルイズの言葉が、たまらなく痛々しかった。

廃校となった学院から、一人、また一人と生徒が去っていく。

その一方で、払い下げられて新装開店することになったレストランの準備に、才人や、ウェイトレスになったシエスタ、使用人たちは追われていた。

「花はこの辺でいいですか？」

「もうちよつと右」

「ここをもう少し広くしよう。お客さんが歩きやすくなる」

「オーナー、この下ごしらえのチェックお願いします」

「……よし、いいだろう。この味でいこう。デザートは？」

「全てOKです！」

「よし、千客万来、間違いなしだぜ！」

厨房、ホールは活気に満ちていた。

学院からトリスタニアへの道すがら、とある農村。

「ここは、俺たちの畑なんだ！ もう貴族に作物を納めなくてもいいんだ」

「うれしい！ 精一杯守っていきこうね！」

農民……元平民の一家が泣いて喜んでいる。

温かい土を握り締めて。

女王アンリエッタが、蜂起軍の要求を呑み、発令した勅令によって

いわゆる『農地改革』が行われた。

地主は元貴族が保有する農地は、王政府が強制的にただ同然の安値で買い上げ、これまたただ同然で小作人である元平民に売り渡された。

他ハルケギニア諸国でも次々に行われ、あっという間に8割余りの農地が元貴族から元平民のものになった。

「ちくしょう！ おかげでこっちは家とわずかな土地しかなくなつた！ 作物は全部平民どもに返しちまつたし、おかげでスツカラカシだ！ 恨むぞ、女王め！」

喜ぶ一家を遠巻きに、地主だった元貴族が恨み言を吐いていた。

その別の方向では、別の元地主の元貴族が5、6人の元平民とおぼしき男たちに袋叩きにされている。

「よくも俺たちを今まで虫ケラ扱いしやがって！」

「俺の兄貴をよくもやったな！」

殴られ、蹴られ、もう抵抗する気力もないのか、元貴族はされるままになっている。

それを横目で見ながら、学院を出た生徒たちの集団はとぼとぼと荷物を持って歩いていく。その中にルイズ、キュルケ、ギーシュもいる。

生徒たちは不安にとらわれていた。

家に帰れば、どうなるんだろう、私たちは。

もう土地は大部分を失っているはずだ。今までの暮らしはできない。それだけならともかく、平民たちは私たちをどうする気だろう。

村八分？ それだけならまだいい。あんな風に袋叩き？ リンチ？ 考えただけでも寒気がする。

すくむ足をぐつと踏みしめ、生徒たちの集団は道を歩いていった。後の話であるが、その翌年のハルケギニア諸国の農業は、自作農の誕生による生産意欲の向上、加えて恵まれた天候により、前年度が嘘のような大豊作だったという。

大豊作には、もう一つ理由があった。

だがそれが始まるのは、もう少し後のことである……。

(5) 処刑

魔法が消えた。

貴族も消えた。

平民は解放された。

平民の境遇は天と地の差で改善された。

だが、何ごともいいことばかりではない。

『元貴族お断り』

『豚と元貴族入るべからず。訂正、豚は許可』

こんな張り紙が、トリスタニアのあちこちの店に貼り出された。

元貴族が街を歩けば、『正義の制裁』の名の下に元平民から暴行が加えられるなど、陰湿な元貴族への嫌がらせが相次いだ。

そして、あちこちで貴族への『処刑』が始まっていた。

「ギーシュ坊っちゃん、良く帰って来られましたねえ」

元平民のリーダー格の少年が言う。

故郷に帰ってきたギーシュを、少年たちが取り囲んでいた。

「……帰ってきて悪いか！」

「いいえ、帰ってくればどうなるか、それをわかって帰ってきた。

その勇気をほめているんですよ。……貴族制度の廃止、そんなもの

じゃ俺たちの怒りは収まらないんだ!!」

言うが早い、少年の右の拳がギーシュの頬に飛んだ。

鈍い音がした。

ギーシュはもんどりうって倒れた。

「うっ、うっ……」

「さあ、次は誰だ？ たっぷり今までのお礼してあげないとな」

「よし、俺がやってやる！」

太めの少年が前に出てきた。

「ギーシュ！ 決闘だのなんだの言って、よくもいじめてくれたな

！ 食らえっ!!」

連続して、ギーシユの顔に拳を叩き込んだ。

「この野郎！！ この野郎！！ この野郎！！」

「代われ、今度は俺だ！！ うおーっ！！ よくも散々俺をバカにしやがって！！」

かつての取り巻き……というより使い走りだった少年が、ギーシユを力の限り殴った。

ギーシユを延々と殴り続けた少年たちは、大笑いしながら去っていった。

「……うう、ひどい……こんな、こんなことって……」

ボロボロに打ちのめされ、泥まみれになったギーシユは、痛いというより、惨めさに涙した。

「元貴族というだけでこんな目に会うなんて……理不尽すぎる……僕も……もしかして……こんなことをしてきたのか！？」

今頃気がついたところで、もう後の祭りだった。

肉体的な暴力の『処刑』だけではない。

精神的暴力での『処刑』も起きていた。

「貴族は出て行けー！」

「出て行けー！！」

「出て行けー！」

「出て行けー！！」

群衆のシュプレヒコールが、大音響となって響く。

「無能な統治者などいらぬ！ 今すぐ出て行けー！！」

「出て行けー！！」

「出て行けー！」

「出て行けー！！」

元平民たちが集団を組んで、ヴァリエール家の屋敷を取り囲んでいた。

集団が手に持ったプラカードは、『ヴァリエール家は全員死刑』『無駄飯食らい』『税金泥棒の貴族』『バカ娘を身売りして賠償しろ』など、毒々しい言葉のオンパレードとなっていた。

ヴァリエール一家は、がらんとした広間で、耳をふさいで震えていた。

使用人は連名で「今日限りお暇を頂きます」との退職願を残して、全員去っていった。

退職金の現物支給と称して、断りもせずに飾ってあった骨董品、宝石類を根こそぎ持ち去っていった。

「……みんな、恩知らずよ。今まで、誰のお陰で生活できたと思ってるのよ……」

家に戻っていたルイズが苦々しげにつぶやく。

次姉カトレアをかばうように後ろから抱きしめながら。

「あいつらこそゲスよ。簡単に裏切るなんて」

「使用人も、平民も、誰も彼も卑怯者よ！」

長姉のエレオノーレ、母のカーリヌが吐き捨てた。

「耐える、耐えるんだ……」

ヴァリエール元公爵は、妻子たちに静かに言い聞かせるしかなかった。

元公爵も身を裂かれるような屈辱を感じていた。

爵位はなくなり、領地は大部分を失い、政治などの公職からも追放され、残った蓄えで生活している状態だった。

トリステイン魔法学院の食堂だった、レストラン『ベル・エキップ』は華やかに開店していた。

古語で、『良き友』という意味である。

店は村落から離れているが、遠くからわざわざ食べにきてくれる客がいる。

旅人たちが立ち寄る、いわば旅の休憩所としての役割も果たしていた。

滑り出しは好調だった。満員御礼とまではいかないが、客足は悪くなかった。

開店して数日たったある日の閉店後、コルベールが土下座してマルトーに頼み込んでいた。

「お、お願いします！ 私を使って下さい！」

落ちぶれたとはいえ、元は貴族。貴族が平民に土下座するとは、数ヶ月前までは天と地がひっくり返ってもありえないことだった。

「おいおい、本気がよ？」

マルトーは、驚きを隠せなかった。閉校式の挨拶で、「食えなくなったら来い」とは言ったが、まさか土下座までしてくるとは思わなかったのだ。

「はい。私には行く所がないんです！ 行く所が……」

「だからって、本当に来ることはないだろう。冗談抜きに、住み込みで皿洗いくらいしかさせられないぞ。給料もあまり出せないぞ。それでもいいのか？」

「はい！ それで十分です」

「……いいだろう。じゃあ今日から入って」

「オーナー、どうも……ありがとうございます！！」

「サイト、指導係頼む」

「へい！ じゃあこっち来て、コルベール先……いや、コルベールさん」

「は、はい……」

才人に連れられ、コルベールは厨房へと入っていった。

コルベールのように、元貴族で職に就けたものはごくわずかだった。元貴族、メイジで失業者が多数発生した。

そして、元貴族への嫌がらせ、差別は深刻化していた。それらはすでに王政府の知るところであった。アンリエッタ女王は、元平民に「復讐はやめよう」と懸命に呼びかけたが、焼け石に水だった。

痛めつけられ続けてきた者たちに、「今までのことは水に流しましよう」と言っても無駄なこと。

おためごかしの言葉や理屈などでは、恨みは終わらないのだ。

このままでは、追い詰められた元貴族と元平民の間でまた争いが起こる。

貴族ではなくなった重臣たちを交えて、策が討議された。

だが、まだ貴族気分が捨て切れず、それでいて平民からの復讐を恐れ、逃げる算段しか考えていない重臣たちに、妙案などあるはずがなかった。

しかし、思わぬところで妙案を思いついた者がいた。

トリスタニアで食材を仕入れるために、才人とシエスタは馬車で移動していた。

王政府から払い下げられた、使い古しの馬車であった。

「コルベールさん、惨めなもんだよな」

「ちよつとかわいそうですね」

「でも仕事がないんだから仕方がないだろ」

「そうですね……」

「元貴族に平民は散々苦しめられてきたんだ、どこも雇ってなんかくれないよ。コルベールさんは、オーナーのお情けがあったから雇ってもらえたんだ」

貴族やメイジが大量に失業していることが、新しい社会問題となっていることは二人とも知っていた。

決してこれは他人事ではない。

もし、破れかぶれで平民に復讐のまた復讐をしてきたら。いつまでもいたちごっこになって恨みは尽きることはない。

政治に参加する機会が元平民にも与えられた以上、自分たちもどうすればいいかを考える必要がある。

これ以上、不毛な争いを起こさないためにも。

そのための案はないものか。

考えながら、何気なく平原を見回してみる。人の手が入っていない荒地だ。

その時、才人の頭の中に何かがピカツと光った。

「あつた……」

才人は、いつか学校の歴史の授業で習ったことを思い出した。

昔の日本では、明治維新で武士たちは職を失った。そこで元武士、いわゆる土族のために主に北海道で開拓が行われた。

このトリステインで同じことはできないか？

元貴族、メイジたちに開拓の仕事をさせるのだ。

この広い空き地を畑にすれば、わざわざトリスタニアまで仕入れに行く手間が減って、一挙両得ではないのか。

「すごいこと、思いついたぜ」

「え？」

「実は……」

才人はシエスタに、自分の考えを話した。

「なるほど！ それは名案ですね！ 元貴族の人々も、仕事に就ければ生活に困ることもないし、争いもなくなりますね」

シエスタは歓喜の声を上げる。

「トリスタニアに着いたら、アンリエッタ様に提案してみよう」

「そうですね。この案をお持ちすれば、アンリエッタ様は会って下さると思います」

二人の馬車は、トリスタニアへの道を軽快に進んでいった。

(6) 追放

「このエセ義賊!!」

「お前なんか死刑になっちまえ!!」

トリスタニアの大通り、ブルドンネ街を連行されていく女盗賊に、群衆からの容赦ない罵声が浴びせかけられる。

マチルダ・オブ・サウスゴータ、人呼んで土くれのフーケ、別の名をロングビルという名の女盗賊。

貴族からしか盗まない義賊として、平民からの人気を呼んでいたあの盗賊が連行されていく。

元は貴族であり、メイジ。魔法が消えた途端、大盗賊はただのコソ泥になり下がった。

平民に手を出さなかったのは、義侠心でもなんでもなく、ない金は盗れなかっただけのことだった。

魔法を失うと同時にあっけなく捕縛され、真相が知れ渡った時、義賊としての英雄像はメチャクチャにぶち壊され、一転して非難的となった。

群衆の中に、シエスタと才人がいた。トリスタニアに到着したら、たまたまフーケが連行される場に出くわしたのだ。

「ミス・ロング……いや、フーケ、どうなるんでしょうね」

「死刑かも知れないな。せめて盗んだものを平民に分けてくれれば良かったのになあ……ねずみ小僧みたいに」

「ね、ず、み?」

「ああ、俺のいた世界で、昔、ねずみ小僧という大泥棒がいて、そいつは悪い奴からしか盗まなかったんだ。で、盗んだ金は貧しい人に分けていたんだよ」

最後まで貴族根性を捨てられなかった、ねずみ小僧になれなかった惨めな女盗賊の後ろ姿を、二人は黙って見送った。

「とても素晴らしいアイデアですわ！　これでこの国に、本当の平和が訪れます！」

謁見した女王アンリエッタは、予想以上の歓喜を持って才人の持ち込んだ提案を讃えた。

「ありがとうございます、サイトさん、シエスタ……」

「い、いえ私は何も、サイトさん一人で……」

「いえいえ、我々も政治に関わる機会ができた以上は、国のことを考えるのは当然のことです」

シエスタの言葉を遮って、サイトは応える。

「あの……こんな席でなんです……」

まごついているシエスタをよそに、やや声のトーンを落として、才人が言った。

「ミス・ロングビルこと土くれのフーケは、やはり死刑となるのでしょうか」

経緯はどうあれ、かつては世話になり、そして好敵手となった女が行く末は、やはり気になる。

罪人を裁くのは女王の権限にはないが、あえて尋ねてみた。

「……それは、私にもわかりかねます。いずれ近い内に裁判が開かれるでしょう」

「そうですね、失礼致しました」

才人は軽く頭を下げた。

「……先程の話ですが、さっそく協議にかけたと思います」

「ありがとうございます、陛下……」

「いいえ、こちらこそ。本当に何とお礼を申し上げたら良いやらほんのわずかの間の暗い雰囲気は、すぐに消えた。」

その後、フーケは無期限労役の刑、つまり無期懲役が確定した。かつてのトリステイン魔法学院での働きが認められ、死刑となるところを、情状酌量で減刑された。

それからほどなくして、新しい農地を開拓する事業が行われることとなった。

公共事業団体、『トリステイン開拓公社』が設立された。

同様の開拓団体が、ハルケギニア各国で設立されていった。

原則として、希望者は元の身分に関わらず無条件で入れることになった。

つまり、元貴族、メイジだけではなく、元平民でも入れる。

住み慣れた土地を離れ、新天地で自分の可能性に賭けてみようとする者が、元平民の中から多数参加した。

「畑を作物で一杯にしてやるぞ！」

「ゼロからの出直しだ。苦しいだろうが、やり抜くぞ！」

元平民の開拓民たちは、熱意に高揚していた。

一方で、熱意が感じられない開拓民もいた。

それは、他ならぬ元貴族、メイジたちであった。

他に仕事がないから農業『でも』やるか、農業『しか』働き口がない、『デモシカ』開拓民だった。

その『デモシカ』開拓民の一家が、新天地に向けて旅立とうとしていた。

「おい、クソ貴族一家の旅立ちだぜー！」

「開拓やるんだってなー、お前らの作ったもんなんか、死んでも食わねえからよー！」

「てめえのクソで肥やし作ってるー！」
集まった群衆の容赦ないヤジに送られて、ヴァリエール一家は屋敷を出た。

「……その屋敷は、好きにするがいい」

ヴァリエール元公爵が、群衆に向かって静かにつぶやく。

「あーそう、じゃあ我々善良な住民が有効に使わせてもらっからさ。
公衆便所に」

どつと笑い声が上がった。

一家は、怒りもせずに背を向けた。

ハルケギニア各国で、平民を苦しめたり、不正を行ったりした元貴族が次々と逮捕され、投獄されていた。

だが、政治の知識がない元平民だけに元貴族がしていた役人の仕事を任せるのは不可能だ。

有能さを認められた元貴族は、役人の仕事をすることを条件に刑の軽減、免除がされるといった、いわゆる司法取引がされることになった。しかし、給料はただ働き同然に減俸となった。元平民の厳しい監視の目が光り、怠慢行為があれば再び投獄される。

失墜した権威は、役人になったところでもう戻らない。

ヴァリエール元公爵も、一時は身柄を拘束された。

裁判の結果、執行猶予付きの有罪判決が下った。

「国政に携わる者として、平民を無視するという怠慢はあったが、十分に反省の態度は見られる」という判決理由を、元公爵はうつむいたまま聞いていた。

事実上の無罪となったが、貴族制度の廃止により爵位を奪われることは、貴族にとって死刑も同然のこと。何の喜びもない。

釈放され、屋敷に戻ると、周りに陣取っていた元平民から物を投げつけられ、罵声を浴びせかけられた。

使用人は全員去っていった。

それなりに残った蓄えも、いずれは底をつく。

働こうにも、まともな仕事になど就けるはずがない。

どうすればいい。

そこへ、トリステインで開拓事業が始まるという知らせが入ってきた。

衣食住は、最低限ではあるが保証される。

開拓した土地は、自分の物とすることができる。

税として納めるもの以外の作物は、自分の物にすることができる。

聞く限りでは美味しい話だが、農業が甘いものではないことはわかっている。

だがもう、ここは自分たちのいる場所ではない。出て行けというなら、どこへでも行く。

延々と続く元平民からの嫌がらせには、これ以上耐えられなかった。諦めにも似た境地で、一家は開拓民となることを決意した。

病弱なカトレアは、自分は残ると言ったが、父から「お前を置いては行けない、畑仕事は無理でも、簡単な家事ならできるだろう」と説得され、一緒に行くことになった。

かくして、屋敷を捨て、住み慣れた土地を捨てたヴァリエール一家は、新天地へと旅立ったのだった。

「貴族を追放したぞー！」

「バンザイ！」

後ろからが歓喜の声が聞こえてきたが、一家にはもうどうでも良かった。

もう何も聞きたくない、もうこんな所にはいたくない。

「……行きましょう」

ルイズはカトレアの車椅子を押しした。

後ろから更に罵声と嘲笑が飛んできたが、もう後ろを振り向きたくはなかった。

一家は、黙々と歩いていった。

数日後のベル・エキップ。

「あの……」

「すいません、今日は定休日です……!？」

店の前を掃除していた才人は我が目を疑った。

「タバサ!? タバサじゃないか!」

忘れもしない学友、そして戦友が、そこに立っていた。

「サイト……お久しぶり……」

タバサ……本名、シャルロット・エレヌ・ド・オルレアン。ガリア女王その人だった。

「どうしてここに!？」

「廃位されて、城を追い出された」

「廃位!? 今の王様は?」

「ジョセフの遠い親戚。名前は知らない……もう王は飾りだけの存在だから、誰でも良かった」

憔悴し切ったタバサの頬はこげ、目は死んだようにうつろだった。

「とにかく、中に入れ。こんなにやせて……何も食べてないみたいじゃないか」

「もう3日、草と水だけ」

「わかった。すぐに食事用意するから」

才人はタバサを連れて店内に入った。

足取りがふらついている。

「おい、大丈夫か?」

「大丈夫……」

大丈夫なわけがなかった。いくら見かけによらず体力があるタバサとはいえ、過酷な旅で体力は限界寸前だった。

もしあと1日到着が遅れていたら、行き倒れになっていただろう。

「ほら、肩につかまれ」

「ありがとう……」

才人の肩を借りて、タバサは歩き出した。そこへシエスタが出てきた。

「才人さ……!? え!?! ミ、ミス・タバサ!?!」

「あ、シエスタ。ちょうどいい所に。説明はあとにして、食事頼む」

「は、はい、すぐに!」

あわててシエスタは厨房にすっ飛んでいった。

「タバサは?」

医務室から出てきたシエスタに、才人が聞いた。

「疲れ切っていましたね。今寝付いたところです」

「無理もないよ、草と水だけで3日も歩いたんだから。しかし、ひでえよな、ガリアの奴ら。しかも追い出したのは、元平民がタバサを追い出せと騒いだから、だって? タバサが何したって言うんだ」

「ミス・タバサがかわいそうすぎます」

二人の胸を義憤と悲しみがよぎった。

話はこういうことだった。

元平民の、タバサ廃位を訴える声は日を追うごとに激しくなっていた。

『無能王』と呼ばれたジヨセフになぞらえて、タバサを『無能女王』呼ばわりした。

タバサことシャルロット女王が、ガリアでの平民の生活を改善してくれる、その期待を裏切られた反動が、タバサ廃位運動を激しくした。

平民の手によって再び革命が起きることを危惧した大臣たちの手により、タバサは廃位された。

使い魔シルフィードはいない、独りぼっち、着の身着のまま国を追い出された時の惨めさはどんなものだったろうか。

他に行く場所がないから、歩いてここまでやってくるしかなかった。タバサを追い出した連中は、やるうと思えば処刑することもできただろう。もしかしたら、処刑の手間を省くために、トリスティンしか行く所がないのを知っていて、途中の行き倒れを狙ったのかも知れない。

「……俺、わかんなくなってきた。悪いのは本当に貴族だけなのか、平民が絶対に正しいのか」

「私事です」

魔法を失った貴族は、平民に敗れ去った。

無血革命で、貴族は地位を失った。

確かに貴族の横暴から解放されて、最初はうれしかった。

だが、貴族も人間、誰もが皆、性根が腐ったクズとは言い切れない。善良な貴族もいただろう。

確かにルイズは才人に対して、悪質な虐待、いじめ以外の何物でもない仕打ちをした。理由はどうあれ、許されるものではない。だが、これだけは言える。

ルイズは態度は悪くても、決して悪人ではないし、クズでもない。

もちろん、ギーシュも、キュルケも、もちろんタバサもだ。

「才人は、元貴族の人たちのことは怒ってないんですか？ 私
はもう、怒ってなんかいません」

「俺だって怒ってなんかねえよ。でも許した覚えもない」

「怒ってないけど、許してもいない……？」

『怒っていない』と、『許した』は違う。

「あれだけの仕打ちされりゃ、当然だろ。正直言って、いつかルイズを殺してやると思ったことも1回や2回じゃない。周りの連中も、どうして止めてくれないんだ、助けてくれないんだって思ったた。しよせん貴族なんてこんなものか、貴族なんかクズだって思ったよ。シエスタがいなかったら、俺、耐え切れなくて……どうなってたか

……」

「え、そ、そんな……私……」

シエスタは顔を真っ赤にする。

「貴族を許せないって気持ち。これだけは、どうしても消せないよ。許したい、でも許せない。どうすりゃいいのか、俺にもわからない」その時、突然医務室のドアが開いた。

「ごめんなさい!!」

部屋から飛び出してきたタバサが、床に土下座した。

「な、何やってんだ、タバサ!!」

「……全部、私が悪いんです」

土下座しながら、はつきりと聞こえる声でタバサが言った。

「……何もかも失った今こそ、あの頃の自分のバカさ加減がわかります。ミス・ヴァリエールの狼藉を知っていて止めなかった、私も同罪です。申し訳ございませんでした。この償いは、一生かけてします」

「ち、違うんだ。タバサを責めてたんじゃない」

「そ、そうですよ。才人は……」

二人はあわてて弁解する。

「いくらお詫びしてもすまされることではないことはわかっています。でも、少しでも償いがしたいんです。死んで詫びると言うなら、死んでお詫びします!!」

「落ち着け、落ち着くんだ!」

「ミス・タバサ、ベッドに戻りましょう」

なんとかなだめて、タバサをベッドに戻した。

「ごめん、無神経な話をしちゃったな」

「申し訳ありませんでした」

今度は才人とシエスタが謝った。

「……いいえ、さっきはつい……でも、私は……サイトが苦しんでいるのに、見て見ぬ振りをしてしまった……私も……いじめに参加していたのと同じ……私は……私は一体……一体……どうすればいいの……教えて……」

嗚咽するタバサを、シエスタはそっと抱きしめた。

才人は、シエスタの背中に回されたタバサの手に、そっと自分の手を重ねた。
医務室の中に、タバサの嗚咽が響いた。

(7) 逃亡

開拓のために割り当てられた土地は、予想以上の荒れ模様だった。一目で、農耕に向かないと素人目にもわかる。

雑草がはびこり、小石が転がる土。

遠くには、かつての学び舎、トリステイン魔法学院……だった、今はレストランとなった建物が見える。

あそこで、サイトやシエスタは張り切って働いているのだろうか。

ルイズはそんなことを思いながら、新天地……となるはずの場所に立っていた。

ここが我が家に割り当てられたのは何かの縁だろうか。

それとも、誰かが仕組んだ当てつけなのだろうか。

少し前まではあそこの生徒だった。今は一介の開拓民にすぎない。それを思い知らせるための。

農業の経験も能力もない元貴族に、畑仕事のノウハウを教えるのは、農業では先輩格の元平民だった。

仕事に入る前に、まず農業について学ぶ、研修が行われた。

「野良仕事って奴は、急がなくていい。ゆっくりでいいから、極力休まずにやるんだ。急いでやっても、休んではかりじゃ意味がない。ゆっくりでも休まずにやった方が、結局は早いんだ」

「農具は、切れなくなったらすぐに研げ。良く切れないままですら、仕事が遅くなる」

ヴァリエール一家を始め、開拓民が入植して2日目の朝。さつそく、農具を振るう音が響き始めた。

しかし、ものの3時間としないうちに、「こんなはずじゃなかった」という空気が、良く晴れた空の下に漂い始める。

元貴族の開拓民たちの手には豆がいくつもできている。
痛いのを我慢して、農具を振るう。

「なんだなんだ、そのへっぴり腰は！　腰が入ってねえぞ！」
現場のチーフとおぼしき男の声が飛ぶ。

「す、すみません……」

ヴァリエール元公爵は、弱々しく謝った。慣れない農作業で、声に
力が入らない。

「そんなことじゃ、作物なんて一つも穫れないぞ」
慣れない農作業で、何度となく怒鳴られた。

「……ちくしょう、女王の嘘つきめ！　まるで、奴隷みたいな扱い
じゃないか！」

「散々つばら平民を奴隷みたいな扱いしてきたのは誰だっけ？　元
公爵さんよ」

毒づいた元公爵に、チーフは嫌味つたらしく言う。

「そ、それは……しかし、この私を誰だと……」
「俺たちと同じ、開拓農民だ。あんたがどんなに偉かったかは知ら
んが、いつまでも貴族気分でいるんじゃないやねえよ！」

罵倒される父を、長姉エレオノールは横目で悔しそうに見ていた。
所属していた王立魔法研究所、いわゆるアカデミーは存在意義を失
つて解体、公職を追放されて故郷に戻ると父と同じく、いや、それ
以上の罵声を浴びせかけられた。

「よく図々しく戻って来れたな、アカ公！」

カツとなつて元平民の一人を殴つてしまい、逆に元平民の群衆に袋
叩きにされた。

「魔法が使えない貴族なんか怖くねえんだよ！」

「悪徳貴族は正義の名のもとに処刑！」
多勢に無勢、抵抗はほとんどできず、エレオノールは殴られ、蹴ら
れ、小便をかけられた。

あの時のどうすることもできなかつた悔しさ、惨めさは、未だに消
えてくれない。

……私は国のために一生懸命やってきた。その末路はこんなものだというのか。それとも、私のやっていたことは自己満足に過ぎない、愚かなことだというのか……

「コラ！！ そのアカ公！ ポケツとしてんじゃねえよ！ そんなんじゃ、作物どころか、種まきさえできねえぞ！！」

「す、すみません……」

惨め過ぎる。でも、泣いている暇はない。

黙々と、農具を降り続けた。

母、カリーヌも、黙々と作業を続けた。

『烈風のカリン』と恐れられた女戦士も、今では武器の代わりに農具を振るう開拓農民だ。

今の自分たちを見たら、あの男……サイトは「ざまあみる」と大笑いするだろうか。

それとも、無言で殴られるだろうか。

嘲笑される、仕返しをされる心当たりは、一家揃ってありすぎる。

次女カトレアは別としても、ルイズのことで、幾度も半死半生の目に会わせてきたのだから。

「おい、おばちゃん！ ゆっくりでいいから休まずにって昨日言われただろ！ 休むな！」

「お、おばちゃん……」

カリーヌのこめかみが引きつった。

言うに事欠いて、『おばちゃん』呼ばわりとは。

それに、命令はずつとしてきたが、命令されることは何十年ぶりだろうか。

人間は、一度威張る快感を覚えると忘れられなくなる。誰かの下で命令されるということは耐え難い屈辱になる。

骨の随から威張ることが当たり前になっていたカリーヌは、どうしても現状を受け入れることができないのだ。

「おいおい、俺のことを睨んでもしょうがねえよ。嫌ならいいんだぜ、やめたって。その代わり、行く所なくて野垂れ死にするのが落

ちさ」

チーフは臆する様子もなく言う。

「やりたい……です……」

「だよな。あと、言っとくけど、俺を殴ったらクビだからな。一応、この現場チーフ仰せつかってるから。わかってるな。文句あるか？」

「文句は……ない……です……」

「よし、じゃ続ける」

そう言うと、チーフは薄ら笑いを浮かべながら去っていった。

明らかに、『指導』を口実に貴族への仕返しをしているのが見て取れた。

……くそつたれっ!!!

一家は、声に出せない怒りを、作業にぶつけるしかなかった。

ヴァリエール家の近隣の土地には、キュルケの家族のツエルプスト一家、ギーシュの家族のグラモン家、さらにはモンモランシー、マリコルヌなど、かつての級友の家族が入植していた。

かつての級友が、開拓民として再び集まる格好になった。

全く見知らぬ土地で、知り合いもいない中で作業をやるよりは、馴染み深い土地で、知り合いが多い中で励まし合いながらやる方がいい。

入植者を土地に割り振る側の、せめてもの親切……かはわからない。休憩時間となった。

「ふーん、あんたも同じだったのね」

「そうよ。ほんと、惨めすぎるわ……」

木陰でルイズと肩を並べてキュルケは、家に帰った時、帰った後の話をしていた。

ゲルマニアは平民でも貴族になれると言っても、それは金があれば

の話。

貧しければ平民として蔑まれるのは同じことだった。

キュルケは家への帰り道、不安は消えなかった。

元貴族が袋叩きにされているのを目の当たりにしてしまったから。

だが、ここはトリスティンとは違う。あそことは違って、この貴族は横暴なことはそれほどしなかったはずだ。人々は歓迎してくれるものと思っていた。もしかしたら、歓声と拍手で迎えてくれるかも知れない。

だが、甘すぎる幻想は家の門が見えてきた途端に消えた。

「がふっ！！」

石をぶつけられた。小石だったが、殴られたような痛みが頬に走った。

「この淫売！！」

「失せるーっ！ 汚らわしい！！」

「てめえには売春宿がお似合いだ！！」

続いて巻き起こる、激しいブーイングの嵐。元平民たちが草むらから続々と現れ、罵声を浴びせかけた。

たまらず、キュルケは屋敷に駆け込んだ。

「……あとはあんたと同じ、毎日毎日、家の周りで平民が出て行け、出て行けの大合唱。ゴミを投げ捨てて行く平民もいるし、使用人に根こそぎ骨董品とか宝石とか持っていかれたし、もうあんなところで暮らせないわ」

キュルケはらしくないくらいの悲しげな顔をする。

「そうか、二人とも……」

ギーシュが立っていた。

「ギーシュ……は、聞くまでもないわね」

ルイズは聞きかけてやめた。

殴られたアザが、顔中に痛々しく残っている。

モンモランシー、マリコルヌの顔にも、傷やアザがあった。

どんなことがあったかは聞かずともわかった。

日が西に傾いていた。

「よし、今日はここまで!」
チーフの声がした。

開拓民たちは、そろそろと宿舎に引き上げていく。

「ふーっ、くたびれたぜ!」

「こんなのまだ序の口でもねえよ。これからが大変だぜ」

元平民の開拓民が清々しそうにしているのに引き換え、ルイズたちは、疲労困憊、歩くのがやっとの状態だった。

一家は粗末な掘っ建て小屋の宿舎に入った。ルイズをして、『豚小屋』と言わしめたほどの、雨風を凌ぐのが精一杯のオンボロ小屋だった。

周囲には宿舎がいくつも建ち並び、無人地帯だった所に新しい集落が誕生していた。

「お帰りなさい」

次姉、カトレアが食事の用意をして待っていた。

「カトレア、起きていて大丈夫なのか?」

元公爵がいぶかしげに聞く。

「ええ、今日は身体の調子がいいのです。いえ、このところ、調子はずつと良くて」

「いつからだ?」

「ええっと、確か……あの事件が起きる少し前だったと……それがら体調が良くなって……」

あの事件……一連の無血革命だ。その少し前と言えば、魔法が消滅した頃のことということになる。

「それは結構なことね」

カリーヌは安心して微笑むが、一つの前測が脳内に浮かんだ。

革命が起きる前、世界から系統魔法が消えた。その頃から体調がい

いとカトレアは言っている。

もしかしたら、カトレアの体調が悪くなったのは、魔法が消えたからではないのか？

魔法が、カトレアの身体を蝕んでいた病魔の原因だったのか？

だとしたら皮肉だ。貴族の誇りと引き換えに、カトレアの体調が悪くなったとは。

いや、娘の身体と貴族の誇りを天秤にかけるようなまねをしたら、貴族失格以前に親失格、人間失格だ。

しかし、真相を知る術はない。今はするべき仕事をするのが精一杯だ。

カーリ又は考えるのをやめ、食卓につくのだった。

翌朝。

開拓民たちが騒いでいる。

「さっそく一人逃げたってよ」

「元貴族の奴だってな。捕まったら、牢屋だぜ」

開拓民は、開拓公社から生活費を給料の前払いという形で支給されている。勝手に出て行けば給料のもらい逃げで契約違反となり、当然罪に問われる。

その日も、ヴァリエール一家は怒鳴られながら作業を続けた。

昼食として支給されるのは、パンとわずかな野菜。

使用人が作った食事を悠々と食べていたあの頃が、まるで嘘のようなひもじさだった。

その翌日。

マリコル又の一家が逃げた。

さらにその翌日には、モンモランシーの一家が逃げた。

ギーシュ、キュルケ、そしてルイズの一家は残った。

「僕は逃げないぞ、行く所がない……」

「私も、行く所がないから……」
頑張ろうと言う元級友の言葉を、ルイズは上の空で聞いていた。
その日の夜。
集落から一つの人影が飛び出していった。
ヴァリエール一家の小屋。
空の寝床の上に、一枚の紙切れが残されていた。
『もう耐えられません ごめんなさい ルイズ』

次々と開拓民たちが逃げていく開拓集落をよそに、ベル・エキップは相変わらず盛況であった。
タバサは、才人がマルトーに頼み込んで、住み込みで雇ってもらえた。

コルベールと並んで、皿洗いの仕事をこなした。
皿洗いに慣れてきたある日のこと。

「……研究は、今もやってらっしゃるのですか……？」
皿を洗いながら、タバサがコルベールに問いかけた。

「!? なんです、いきなり」
タバサの方から話しかけられ、コルベールはうっかり皿を落とすところになった。

「……あの、研究は……」
「ああ、もう研究なんてどうでもいいんですよ……研究なんて、くだらないことです……」

顔を曇らせ、コルベールは答えた。
そこへ、才人が使い終わった皿を持ってきた。

「ほら、しゃべってないで、この皿も頼むよ。今、混んでるんだから」

「は、はい……すみません……」
「……ごめんなさい……」

皿を渡してホールに戻る途中で、才人は先程のコルベールとタバサの会話を思い出していた。

……「もうどうでもいい」か……まずいな、この頃のコルベールさん。無気力になりかけちゃってるぜ……

ただ与えられた仕事を、機械的にこなすだけの毎日。

こんな骨抜きのコルベールは、とても見てられない。

閉店時間となり、一日の仕事が終わった。

部屋に入ろうとしたコルベールを捕まえて、才人は問い詰めた。

「どうして研究をやらないんです？ コルベールさん」

「サ、サイトくん……」

怒ったような声の才人に、思わずコルベールは引いた。

「中で話しましょう」

言うが早いが、サイトは許可もなしにコルベールの部屋に入った。

コルベールも遅れて入った。

「もう一回聞きます。仕事が終わった後、全く研究をしてないじゃないですか。廃校になったとはいえ、せっかく学院に戻ってきたのに、どうして研究をやらないんですか？ あれほど張り切っていたじゃないですか」

これまた断りもなしに、椅子に腰掛けて才人は問い詰める。

「私は研究はやめたんだ！」

コルベールは吐き捨てるように言った。

「どうしてですか！？ 色々なものを作ったし、俺が元の世界に戻るようにいろいろ努力してくれたじゃないですか。あれは全部、嘘だったんですか？ 単に名声が欲しかっただけなんですか！ 違うでしょう！？」

「ほっといてくれ！ 君に何がわかる！ 発明したアイデアは、そっくり盗まれて私が作ったものではないことにされてしまった」

コルベールは蒸気機関、エンジンという、才人がいた世界にあったもの、魔法なしでも生活を成り立たせることができるものを発明していた。

だが、実用化しようとしたその矢先、革命が起こり、貴族の座を追われ、発明の手柄までも取り上げられてしまった。

苦心して作り上げた手柄を、根こそぎ奪われて平気なわけがない。次の発明をしようにも、ショックでスランプになってしまった。全くアイデアが出ない。

金がなくなり、もう研究どころか生活もできなくなった。

コルベールから取り上げた研究成果で、産業革命のスピードは急速に上がった。

港で、風がなくても蒸気機関で動く船の進水式が華やかに行われた。さらには、エンジンで動く、『馬なしの車』、アルビオンとトリステインを結ぶ『熱気球』が現在開発中だという。

その成果は、全てコルベールではない、別の誰かのものということにされてしまったのだ。

「……もう……何もかもどうでもいいように思えて……貴族でなくなり、研究者でさえもなくなった、今は中年のしょぼくれた親父さ……」

「……そうかよ。わかったよ。あんたはこのまま、皿洗いで終わるような人間じゃないと思ってたのに、がっかりしたぜ。あきらめるのは結構、あんたの自由だよ。でも俺にしたことの落とし前をつけてからにしろ」

「私が君に何を……」

自分は才人に、生徒たちがしたような仕打ちをした覚えはない。なのに何を言うのだ？

「生徒の不始末は教師の不始末だ。ルイズが俺に何をしてきたか、知らないとは言わせない」

「……」

「ギーシュの決闘、あれもやっていいことかどうか、わかるよな？

さらにキユルケの……」

「やめてくれ!!」

「やだね。……生徒を好き勝手にさせた、でも学院は廃校になって、教師じゃなくなったから私は晴れて無罪放免になった、とでも言うのか」

コルベールはうなだれていたが、顔を上げて懸命に言った。

「……私だって、本当は研究をしたい！ 決してあきらめたいわけじゃない。なのに、我々はもう魔法は使えない。それにもう貴族じゃない、教師でもない、金もない。それで、どうやって研究をしろと言っただ！」

「貴族じゃなくても、研究はできるだろ！ 見ただろ、学院の図書館。あれはまだ取り壊されずに残ってる。そこには一生かかっても読み切れないほどの本があるじゃないか。本なら、研究のための資料なら腐るほどあるのに、今までやってきたことを無駄にしちまうつもりかよ！」

「……どうしろと言っただ？」

絞り出すようにコルベールは言う。

「……」

無言で、才人は左手の、ガンダールヴのルーンを見せた。コルベールは腰を抜かさんばかりに驚いた。

「こ、これは……!!? なぜだ!? 魔法はもうないはずなのに……なぜこれが残ってるんだ」

「それはこつちが聞きたいね。でも俺メイジじゃないし、戦争が終わったから軍は除隊しちゃったし、こんなの残ってたって何の意味もないよな。邪魔っけでしょうがねーんだよ、洗っても消えねーし」
コルベールは、心の中で何かが沸き上がって来るのを感じていた。
それが才人にもわかった。

「どうする? 宿題ができちまったぞ」
もう一押しだ。

「宿題を忘れたら、罰当番ですよねえ、せ、ん、せ、い。……もう、

自分に嘘をつくのはやめましょう」

才人は口調を変えて、説得を続けた。

「このルーンの謎を解き明かしたいでしょう？ 他にも、色々やりたい研究があるでしょう！？ だから、やりましょうよ。魔法に代わる新しいものを、もつともつと作り出すために！」

「……あ、ありがとう、サイトくん……やるよ。私はやるよ！」

コルベールは、大粒の涙を流して、それでも気丈に宣言した。

「そう言ってくれると思ってました！ コルベール先生！ 協力が
必要なら、俺は骨惜しみしませんよ」

二人は、しっかりと手を取り合った。その時だった。

「グス……私も、私も……お手伝いします！ グスグス……」

「……私もです、グスッ」

その時、シエスタとタバサが、涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら入ってきた。

「なんだあ？ 二人とも、聞いてたのか」

「す、すみません……」

叱られると思ったか、二人はうつむく。

「いや、おかげで説明する手間、手伝い頼む手間が省けたってものだ。どっちみち、頼むつもりだったからな」

「ミス・タバサ、ミス・シエスタ、ご協力、お願いできますか？」

「はい！！」

二人は涙に頬を濡らしたまま、はっきりと答えた。

月明かりに照らされた、かつてのトリステイン魔法学院の中央に建つ本塔。この中に図書館がある。

たくさん魔法書が置かれており、平民は立入禁止とされていた場所だった。

廃校後、手間と取り壊し、さらには本の処分の費用がかかるのでそ

のまま放置されていた。鍵はかかっていないので自由に出入りできるが、金目のものはないので賊の心配はない。魔法のない世界での魔法書など、おとぎ話程度の価値もない。

それどころか、掃除のため、点検のためなどで全く人が出入りした様子がない。おそらく、蔵書は埃をかぶっていることだろう。

「私はやるぞ！ もう、自分からの逃亡は終わりだ！！」

塔を見上げるコルベールの目は、力強く輝いていた。

「良かった……本当に良かったです……」

「……うれしい……」

「最高に輝いていますよ、コルベール先生……」

一人の学者の復活を、シエスタ、タバサ、そして才人がしっかりと見守っていた。

(8) 謝罪

ルイズは走った。

開拓集落から駆け出ししてきた。

どこへともなく、ただ走った。

足がもつれて転んだ。

立ち上がるうともせず、息を切らしたまま這いつくばっていた。

しばらくそのままの体勢でいたが、やがて膝をついた格好になった。

「わ、私は、なんで、なんで畑仕事なんてやらなきゃいけないのよ

お!! 始祖プリミルよ、教えて下さい!!」

満天の星空に向けて、ルイズは絶叫する。その時だった。

「うるせーな、もう遅いんだぞ」

後ろから、聞き覚えのある声があった。

「サ、サイト……どうして……」

やや怒ったような顔で、才人が立っていた。

「どうしてって、ここはレストランの従業員の寮だよ」

知らないうちに、トリステイン魔法学院……だった場所に走ってきていた。

その学院生寮……だった、食堂と同時に払い下げられて従業員寮になった場所の前に、ルイズはいた。

「寝ようとしたら、なぜかお前がいるじゃねえか。ここが懐かしくなったか?」

「違う……気がついたらここに来てた……ねえ、のどが渴いたから、ちよつと水を……」

「帰れ」

才人はピシヤリと切って捨てた。

「物乞いは帰れ。うちは慈善事業でも教会でもない」

「そ、そんな、ちよつとぐらい……」

「うるさい!! やるものはないから帰れって言うてんだよ!!」

大方、仕事が辛くて逃げ出してきたんだろ？」

凶星を突かれ、ルイズは返事ができない。

「そんな奴にやるもんなんかねえよ、帰れ！ 開拓公社に訴えるぞ！！」

そう吐き捨てる、才人はスタスタと寮に戻っていった。

「サ、サイトお……どうして……」

ルイズは涙声でつぶやく。

いつか、才人と大ゲンカした時の言葉が頭に浮かんだ。

『腹をすかした平民に、一切れのパンでも与えたことがあるか』

一切れのパンどころか、水の1杯も与えたことがない。

才人には？ 死なれたら困るから、つまりは自分の保身のために与えていただけのこと。

……どれだけの平民が、私たちが豪華な食事をしている間に、お腹をすかせていたんだらう……

胸が締め付けられる思いがした。

今、身をもって平民の苦しさを感じ取った。

感じ取ったところで、これからどうする？

このまま逃げ続けても、待っているのは野垂れ死にだけ。嫌だ。

このまま、『ゼロ』のままで死んでしまうなんて。

ルイズは、走ってきた道をトボトボと戻り始めた。

開拓集落に戻ったルイズには、脱走の処罰が待っていた。

みんなの見ている前で、鞭打ちに処せられることになった。

「ぎゃああつ！！ ぎゃあああつ！！」

バシーン、バシーンという音が響く。

両手を縛られ、むき出しにされたルイズの背中に、開拓の現場チーフから木の枝の鞭が打ち付けられる。

「痛いかよ！ 本来なら牢屋だが、これで許してやるんだから、ありがたく思えよ！」

鞭打ちは5分に渡って続いた。

「よし、もういいだろう」

背中が腫れ上がり、とても触れそうにない。

罰から解放されたルイズは、痛さに泣き続けた。

「何泣いてんだよ。さあ、仕事だぞ仕事！ 泣いてる暇なんかないんだからな」

チーフはバカにしたような口調で言った。

その時、

「待て！ ひどいぞ！！」

「こんなの罰にかこつけた、貴族への仕返しよ！ どこまで仕返しすれば気が済むのよ！！」

ヴァリエール元公爵とカリー又だった。エレオノールもいる。

「仕返しとは人間が悪い。規則違反をしたから罰を与えたまでだ」
チーフは悪びれずに答える。

「やり過ぎよ！ 私たちを見下して、そんな陰湿な仕返しで憂さ晴らしがしたいの！？」

エレオノールも声を上げた。

「この前も言つたよなあ、今まで俺たちの事を見下していたのは、誰だっけ？」

「……そ、それは……確かに平民を見下していたことは認めるわ！
それは申し訳ないと思ってる。でも私たちがだつて国のために、家の誇りのために、必死に頑張ってきたのよ。平民の信頼を得られたかって言われれば、そうとは言い切れないけれど……」

「じゃあ、殴られて当たり前じゃん」

処罰を見ていた群衆の中の、元平民の一人が言った。

「国を守る。そのために魔法を使う存在、それが真の貴族である……とか何とか建前ぶっこいておいて、本当はパーティーやら舞踏会やらで、贅沢三昧だっただろ？ 平民がいくら必死に働いても、こ

っそり税で持つていく。そんな奴らが信頼なんかされるもんか」
集まった元平民たちから、そうだそうだと声上がる。
形勢は不利だ。

このままでは、連帯責任で一家丸ごと牢屋行きかも知れない。

「わかった。謝ろう。諸君、申し訳なかった」

「すまなかつたわね」

ヴァリエール夫妻は、ここ数十年、上っ面でもしなかつた謝罪をした。

「何？ その偉そうな謝り方。本当に悪いと思ってるの、『元』公爵殿に『元』公爵夫人。いや、半端者のおっさんとおばさん。悪いと思うなら、土下座して謝れよ」

「何っ!?!」

「よ、よくも……」

「早くしろよ、土下座」

土下座、土下座、と合唱が起こった。

「貴様らという奴は……つけ上がるな」

「本音が出たな。こんな救えない奴らが政治に関わっていたから、トリストインは悪徳貴族の天国だったわけだ」

「何っ!?!」

カリィ又は元平民の男の胸ぐらを掴み上げていた。

「おらおら、殴れ殴れ！ 暴力沙汰起こせ！ 即刻クビだぜ！ やつてみるよ、クソババア！ やれよ!」

元平民は恐がりもせず、楽しそうにけしかける。

カリィ又の拳が堅く握られ、元平民の頬に飛ばうとした時だった。

「待つて下さい！ 私が、代わりにお詫びします」

カトレアだった。次の瞬間、彼女は土下座した。

「ちいねえさま!?!」

ルイズは驚いた。

「皆様、今まで、申し訳ございませんでした。この責任は、一生かけて取ります」

泣きながら土下座した。

「お前は引つ込んでろ！ 畑仕事もしないくせに、しゃしゃり出てくんじゃねえ！！」

男に足蹴にされ、カトレアは地面を転がった。

「や、やめて！ カトレアは悪くないんです……大丈夫？」

エレオノールがあわてて助け起こす。

「みんな、この際こいつらを袋叩きにしまおうぜ！！」

開拓民たちがヴァリエール一家を取り囲んだ。

リンチ寸前の状態だ。が、突然の闖入者に遮られた。

「やめろーっ！！」

一同は驚いて、声のした方向を見る。

「目を覚ませみんな！！ そんな仕返しして何になるんだ！ こいつらはもう貴族じゃない。ただの開拓民だ！」

才人だった。

「誰だ、おめえ！」

平民の一人が、才人に向かって怒鳴る。

「その元貴族の末娘に召喚された哀れな男だよ。……よう、ルイズ。だいぶやられたな」

「私を笑いに来たの？」

ルイズは才人を睨んだ。

「今日は店が休みだから、お前らの仕事ぶりを見に来たんだよ。そしたら、こんなことになってるじゃないか」

「……ごまかしてる！！ 止めに入ったふりして、どうせ本当は、ざまあみろって笑ってるんでしょ！！」

「悪いが、否定はしないぜ。でも仕返しなんてしても意味がない。そんなことしたら、貴族と同じになるからな。平民を見下して、い

じめていたお前らとな！！」

才人は何がしたいのだ。

助けてくれるのか。

それとも、糾弾したいのか。

ヴアリエール一家は才人の真意をはかりかねていた。

だが、ルイズは言い返した。

「……確かに、平民を見下していたことは認めるわ！ あんたにひどいことをしたのも申し訳ないと思ってる。でも、魔法を使えるようになりたい、その熱意余ったのだったのよ。頑張ってるのに魔法が全然使えなくて、ゼロだの、ダメメイジとバカにされて……やっとな魔法が使えるようになったと思ったら、魔法が消えて、貴族じゃなくなってる……今じゃこの通りよ。この気持ち、あんたにわかる!?」

「くつくつくつ……」

才人が皮肉な響きを込めて笑った。

「な、何がおかしいのよ!」

「それがどうしたってんだよ。お前の苦しみは、それっぽっちか。傑作だな」

「な、何ですって!?!」

「俺は平凡な高校生だった。それが突然お前に召喚されて、わけのわからないうちに使い魔という名の奴隷にされちまった。知り合いもないし、誰も頼れる人間もない、他に行くとところもない。バカ犬呼ばわりされて、気に入らない事があれば躰だと言って殴られて飯抜きだ!」

発する言葉に激情がこもる。

「でも俺は、生きるために奴隷になるしかなかった。シエスタたち平民の使用人以外に、誰も人間らしい扱いなんてしてくれなかった。こんな、こんなことって……こんな理不尽なことがあるのか!?!」

「いや、俺だけじゃない、平民はみんな、同じ思いをしてたはずだ!」

「そうだ、苦しかったのはお前だけじゃないんだぞ!」

「お前らの苦労なんか、俺たちの苦労の何万分の一もないんだ!」

「本当のこと言うとな、時々今でも思うよ、お前らのこと、殺してやりたいって。だが、仕返しなんかして何になる!? 仕返しして

元の世界に戻るのか？」

ヴァリエール一家は返す言葉がなかった。

「今でも毎晩、夢に見るよ……元の世界に帰った夢を……でももう帰れない……結局俺は、ここで生きるしかないんだ……お前らだつてそうだろ。もう帰るところなんかないだろ？」

先程が嘘のような、静かな口調だった。

「……いいよ、今までのことは許してやる。お前らはもう、十分罰を受けたみたいだしな。殴られた痛みはほっときゃ消える。でも、平民たちの痛みはそんな簡単に消えると思うなよ」

それだけ言うと、才人は背を向けて立ち去ろうとした。

その時、元平民の一人が飛び出して来た。

「うおおおおーっ！！ 何が『罰を受けた』だー！！」

「うがっ！！」

顔面に拳を受けた元公爵の鼻から鮮血が吹き出した。

「次は俺だ！！ うおおーっ！！」

「があっ！！」

カリーヌが殴り飛ばされた。

「アカ公ーっ！！ 貴様ーっ！！」

「ぐえっ！！」

エレオノールが殴られてうずくまった。

次々と元平民が、再びヴァリエール一家を取り囲み始める。

おさまったはずの、元平民からのリンチが始まるうとしたが、

「やめる！ いいかげんにしないと、開拓公社に報告するぞ！！」

そしたら開拓した畑がパーになるだろ？ それでもいいのか！！」

才人の一言に、一同は振り上げた拳を黙って下ろした。

「……みんな、仕事に行け。解散だ」

チーフはうつむいて指示を出した。

開拓民たちは渋々ながら、仕事へ向かった。

「……あんちゃん、礼を言うぜ」

チーフはうつむいたまま、静かに言った。

「あんたが止めなかったら、俺、監督不行き届きで処分食らったかも知れないからな」

「ヘッ、良く言うよ、あれだけ殴つといて」

才人は投げやりな返事を返した。

「でも、俺からも礼を言うよ」

「？」

意外な言葉に、チーフは怪訝な顔になる。

「使用人からも平民から見放されて、誰にも相手にされなくなつたこいつらの、目を覚まさせてくれたんだからな」

今まで殴られた仇を取ってくれてありがとう、ではなかった。

「サイト……サイトお……うつつ……」

才人は見放していなかった。

恨む気持ちは捨てなくても、それでも見放さなかった。

ルイズの目から涙が溢れた。

「ほら、泣いてる暇なんかねえぞ。これから仕事なんだろ」

才人に言われ、涙を慌てて拭いた。

「サイトさん、ありがとう」

「……ありがとうって言うておくわ」

カトレアとルイズが続けて礼を言った。

「ルイズ。俺の気持ち、わかっただろ？ 自分のしてきたこと、身にしてみてわかっただろ？」

「……うん、わかった」

ルイズは静かに言う。

「わかったら、仕事行けよ。もう逃げ出すんじゃないぞ」

「うん。それじゃ……」

才人に見送られ、ルイズとカトレアは仕事に行った。

畑仕事に戻ったルイズは、懸命に農具を振るった。

カトレアは小屋で家事をしている。

ルイズはすでに気づいていた。

「タベ冷たく追い返したのは、「逃げ出すな」という才人なりの優しさだったということ。」

でなければ、今日助けてくれるはずがなかった。

「……もう私は逃げない。絶対に逃げない……」

ルイズは誰にともなく、堅く誓った。

店の営業終了後や休日を利用して、コルベールは懸命に研究を続けていた。

図書館や寮の部屋で、才人のルーンの謎に挑んでいた。

ガンダールヴのルーンに関する書物は、まだ読んでいないものが多い。

もしかしたら、それらのなかに謎を解く鍵があるかも知れない。

ガンダールヴに関する書物を何冊も読みあさったが、そこから得られる情報はノート1ページよりも薄かった。

やはりガンダールヴの謎なんて、解けないのか……とあきらめかけていた。

「これはどうかな……」

一冊の、くたびれた革製の表紙の本をめくってみた。

「……なんだろう、これは？」

二つの月が朱に染まりし時

器に大きな穴開く

器よりこぼれ落ちし砂は返らず

わずかに残りし砂もやがてこぼれ落ち

最後の一粒は印を持つただ一人の手に握られん

砂を握りし者

ただ一度だけ開く扉を手に入れん
その扉の向こう それは彼の生まれし里
その扉の開かれし日 それは砂の消えし日

数十ページ目に、妙な詩が書かれていた。
その下には、ガンダールヴのルーンが大きくはっきりと描かれてい
る。

「こゝ、これは……!?!」

(9) 決意

コルベールの発見。

それからの研究の進展は目を見張るばかりだった。

「そ、それじゃつまり、その本は、二つの月が朱に染まった時が、魔法がなくなる時だという予言書だったんですか!？」

才人は思わず、大声を出していた。

「その通りだ。そして、ガンダールヴのルーンを持つ者が、ただ一度だけ、世界扉ワールド・ドアの魔法を使うことができる。それが、最後の魔法となる……というわけなんだ」

コルベールは、研究の成果を才人、シエスタ、タバサに報告した。

世界扉……それは、教皇ヴィットーリオしか使えなかったはずの魔法。

それを自分が見えるというのか。

「つまり俺が、この世界の最後の……メイジってわけなんですか!？」

「そういうことになる。さらにこの文章には続きがあつてね。『数えて50の夜、扉は開かれん』とある。つまり、魔法が消えて50日目の夜が、世界扉の魔法が見える時だ」

「50日目? じゃあ、魔法がなくなった日から数えて……あと10日じゃないですか!」

この世界の最後の魔法。

それは、才人の手にゆだねられた。

最初で最後の、たった一度だけの魔法として。

「世界扉……元の世界に戻るためのドア……」

元の世界に戻る……一度はあきらめたはずだった夢。

それが、思わぬ大逆転となつてかなうことになつた。

しかし……。

あれほど、こんな世界は嫌だ、元の世界に帰りたいたいと思つていたは

ずなのに。

すぐに帰りたいという気にはなれなかった。

奴隷扱いされたり、貴族にいじめられたりと、死んでしまいたいくらい嫌なことがあった。

でも、こちらでたくさんのかげがえのない友に会えた。

そして、少なからず自分は成長することができた。

それだけではないにしても、このハルケギニアに情が移ってしまったのか。それとも、こちらが自分のいるべき世界なのか。

才人は逡巡を隠すことができなかった。

「迷うだろうね。元の世界に帰るか、それとも、ここにとどまるか。気持ちはわかる」

コルベールが静かに言った。

「でも、それは君自身が決めることだよ。誰も強制なんてできない」

「わかってます。それじゃあもう長居は無用、はい、さようなら、なんてことはできません。ここで出会った、大事な人たちとそんな簡単に別れられるわけがありません。だからって……いつまでもここにいるわけにもいきません」

コルベールも、シエスタ、タバサも黙って才人の話を聞いていた。

「俺には俺のいるべき世界があります。そこでやり残したこと、やらなければならぬことだってたくさんあります。大事な人がいるのは、元いた世界だって同じです」

「そうか……そうだな……」

「サイトさん……」

「サイト……」

「どうするかは、よく考えて決めます」

「うん、それがいい」

コルベールは、大きく頷いた。

自分の部屋に戻り、才人は思案を巡らせ続けた。たった1年と少しくらいの間に、一生分の経験をしたような気がする。

ある日突然、ハルケギニアに召喚され、わけのわからないまま使い魔という名の、ルイズの奴隷にされてしまったこと。

そこは貴族の横暴がまかり通る腐った世界だったこと。

ギーシュと決闘することになり、ガンダールヴの力で勝ったこと。

アルビオンなど、幾度の戦争で戦いの日々を送ったこと。

一人前の戦士となるために、辛い修行に耐えたこと。

そしてある日、ハルケギニアから魔法が消え、無血革命により貴族制度が廃止されて念願の自由の身となったこと。

左手のルーンを眺めているうちに、幾多もの思い出がよみがえってきた。

だが……。

「……………」
才人は無言で部屋にあった私物を集め始めた。

「……………」
剣、盾、書物……向こうから持ってきたもの以外の全ての私物を縄で綴じた。

「これでいいんだ……………」

誰にともなく、才人はつぶやいた。

元の世界に帰ろう。

決意はついた。

それと同時に、大粒の涙が目から溢れ出した。

その時、才人の部屋のドアの前に立つ者がいた。

シエスタだった。

やはり才人のことが好きだ。

その気持ちを伝えよう。

思いとどまってくれるかも知れない。

いや、思いとどまってくれないとしても、「俺についてこい」と言

つてくれるかも知れない。

ノックしようとして、手を止めた。

部屋の中から、嗚咽する声が聞こえてくる。

「サイトさん……?」

シエスタは、ドアの隙間から、そつと中をのぞいてみた。

「うつつ……帰れるんだよ。今度こそ地球へ、日本へ帰れるんだよ

……母さん……俺、帰れるんだよ……みんな……」

才人は、声を上げて泣いていた。

……そうよね……サイトさんは、元の世界に戻るべきなのよね。お母様のためにも、お友達のためにも……

シエスタの目からも涙が溢れた。

大事な人がいるのは、シエスタも同じだ。

その大事な人を捨てることはできない。

才人がそんなことをさせるはずがない。

大事な人と離ればなれになることがどんなに辛いことを、才人も知っているはずだ。

自分の都合で才人を引き止める権利など、ありはしない。

シエスタは黙って立ち去った。

翌朝。

「俺、元の世界へ帰ります!」

朝礼が行われるホールで、はっきりと才人は同僚たちに告げた。

コルベールは、「そう言うと思ったよ」と言いたげな顔で、黙っていた。

シエスタとタバサはうつむいていた。

「そうか……残念だな。もう……会えないのか……」

マルトーの問いに、才人はだまって頷いた。

「……」

重苦しい沈黙が流れた。

今生の別れ。

もう二度と、才人には会えないのだ。

「そうか、元の世界に帰るのか……」

「残念だけど、仕方ないよな……」

「しつかりやれよ、サイト」

店の仲間たちが、ねぎらいの言葉をかける。

「みんな、今まで本当にありがとう」

「サイト……ありがとう……」

「タバサ……俺こそ、ほんとうにありがとうな。シエスタ……」

「サイトさん!!!」

シエスタが突然発した大声に遮られた。

目は充血して赤い。

「今だから言います。私、サイトさんが本当に好きでした。でも、タバー晩、涙が枯れるほど泣き明かして、サイトさんへの思いはすつかり断ち切りました」

シエスタは早口にまくし立てる。

「だからもう、私のことは気にしないで下さい。どうか、お母様を安心させてあげて下さい」

そう一気に言うと、シエスタは走り去った。

去り際に、目に涙が光っていた。

誰も追う者はいなかった。

「……シエスタって、芝居下手だよな。あれのどこが断ち切ったんだよ」

「……下手すぎる……全然断ち切れてない……」

才人とタバサは、うつむき加減に言い合った。

「サイト、お前は女心がわからねえ奴だな」

マルトーが言った。

「？」

「女ってのはな、『黙って俺についてこい』って言われるのを待つ

てるもんなんだよ。何であそこで、『そんなこと言うな、俺が面倒見てやる、俺についてこい！』って言うてやらないんだ。男ならそれくらい言えなくてどうすんだ」

「……そ、そんなこと……」

「わかってないのはオーナーじゃないですか」

「コルベールが怒ったように口を挟んだ。

「どんな気持ちで、ミス・シエスタがあんなことを言ったか、わかりますか？ ついて行きたい、一緒に連れて行って欲しいとどれだけ言いたかったかわかりますか？ でも、それはできないんです。そんなことをしたら、もう家族とは会えなくなるんです。そのことは彼女自身も良く知っているんですよ。サイトくんを困らせたくなかった、だからああ言うしかなかったんです」

「そ、それはそうかも知れないが……」

「サイトくん、できることなら君だつて連れて行きたいだろう？」

「そ、それは、できるなら……でも無理です。シエスタに、家族や友達、店の同僚たちを捨てさせるなんてできません」

連れて行きたい。でもできない。それは才人もわかっていた。

「自分のエゴで、シエスタに大事な人を捨てさせるようなことはしたくありません」

「そうだ、辛いのは君だつて同じだね。でも、世の中にはどうしてもできないことがあるんだ。……オーナー、あなたがサイトくんの立場だつたら、言えますか？ 家族を捨てると。見知らぬ世界で面倒を見てやる、幸せにしてやると言えますか？ 家族にはもう会えない、それで心からの幸せが手に入りますか？」

「……」

マルトーは返す言葉がなくなってしまった。

「辛いんですよ、サイトくんも、ミス・シエスタも……」

「わかったよ。……サイト、余計なことを言つて悪かった」

「いえ、いいんです。シエスタに悪いことしちゃったのは確かだし、それから長い沈黙がホールに流れたが、やがて才人がポツリと漏ら

した。

「……シエスタの気持ち、大事にしてやらないとな……中途半端に優しくしたら、余計傷つけるだけだしな……」

「……うん……私もそう思う……」

タバサは頷きながら、心の中でつぶやいていた。

……私だって、私だって……ずっとサイトが好きだった……ついて行きたいのは私だって同じ……でもそれを言っちゃいけない……そうだ、本当に好きなら、これ以上、才人を困らせてはいけない。それが精一杯の、タバサの気持ちだった。

……ルイズ、あなたはどうなの……

そこにいない級友に、タバサは心で呼びかけた。

才人が帰ることになっても、変わることなくベル・エキップは営業していた。

「あれ？ シエスタは？」

才人は、シエスタの姿が見えないのに気づいて、同僚の一人に声をかけた。

「ああ、休みが欲しいって、田舎に帰ったよ。1週間ほど帰ってくるってさ」

「1週間？ そんなに休んでどうするんだろ？」

「さあね。気持ちの整理したいんじゃないのか？ この色男、憎いぜ」

「からかわないでくれよ。さ、仕事仕事」

二人は、仕事に戻った。

故郷のタルプ村に帰る途中で、シエスタは開拓民の集落に立ち寄り

た。

そして、才人が元の世界に帰ることをかつての学院生たちに報告した。

「そんな……そんなことができるのか……サイトが……」

ギーシュがまず、驚きの声を上げた。たった一度だけとはいえ、世界扉が才人に使えることに驚いた。

「そうか、行っちゃうのね……いつ？」

キュルケが聞いた。

「再来週の、虚無の曜日之夜です」

「あ、そうなの。さぞかし、せいせいしてることでしょうね。こっちじゃろくな思い出がないんだし。私もせいせいしたわ。仕返しされる心配がなくなつて。さあ、休憩時間は終わりよ。あんな奴のことなんか忘れて、仕事、仕事！」

ルイズは走り去っていった。

「……ルイズって、芝居下手だよな……」

「……下手すぎる……全然せいせいしてない……」

ギーシュとキュルケがつぶやく横で、シエスタは黙ってうつむくしかなかった。

朝方、才人とタバサが、自分のことで同じことを言っていたことは知る由もなかった。

ついに、海にアルビオン大陸が着水した。

トリステイン沿岸に津波が押し寄せた。

しかし、もうすぐ着水するのを見計らって住民は避難していたため、海沿いの家で壊れたものはあったが、人的被害は皆無であった。

間もなく、アルビオンから、空ではなく海を行く船がやってきた。

乗組員たちは、歓喜をもってトリステインの住民に迎えられ、花束を贈られた。

こうして、ハルケギニアの先住魔法は完全に消えた。

そして、最後の一つの魔法がもうすぐ消える……。

慌ただしく時は流れ、あっという間に才人の帰還する日がやってきた。

朝方、才人は、仕事が始まる前の開拓民の集落へ別れの挨拶に訪れた。

「みんな、がんばったみたいだな」

「もちろんよ！」

才人に、ルイズは胸を張って言った。

畑はまいた種が芽を出し、薄い緑のじゅうたんになっていた。

「大変だったろうな」

「そりゃ、辛かったさ。何度、もうやめてしまいたいと思ったか」

ギーシュが言う。

元平民からの陰湿ないじめは続いたが、じつと耐えた。

いつとはなしに、誰も手を出してこなくなった。

元平民にも恥の感情があったのか、いくら挑発しても乗ってこないのであきらめたのか。

それはわからない。

でも、そんなことはもうどうでも良かった。

周りがどうだろうと、ただひたすら、農作業に精を出すだけだった。「どんなに辛くても、僕にはもう行くところがないから、ここでがんばるしかなかったんだ」

「私も……」

ギーシュとキュルケが静かに言った。

くたびれた農作業用の服を着た3人に、もう貴族の面影はない。

「僕、この仕事に、本腰入れるよ」

「もう仕事なんて選べる身分じゃないから。でもそれ以上に、私にできることが見つかったから」

「私、魔法以上に価値のある仕事やるわ。魔法なんかなくなっちゃって平気よ」

3人の顔は、魔法を失って無気力になった時が嘘のように輝いていた。

「お前ら、変わったな。貴族だった時より、ずっとかっこいいよ！ やっぱり、人って変わるんだな」

「ありがとう」

才人の心からの賛辞に3人は揃って、笑顔で礼を言った。

「あ、そうそう。タバサは？」

キュルケが思い出したように聞く。

「ああ、うちの店で元気に働いてるよ。仕事は違ってても、立派にやってるよ。前よりむしろやるようになったぜ」

「そっか、良かった……」

「昼から送別会やるから、お前らも来いよ。でも、送別会の前にオーナーに謝っとけよ。特にギーシュ、お前、一番印象が悪いんだからな」

「う、うん……わかってるさ……」

ギーシュはばつが悪そうに言う。

「そっか、今夜が……お別れなのね。残念だけど、仕方がないわね」

「時々、僕らのこと、思い出してくれよ」

「サ……サイト……」

「何？」

「げ、元気でやりなさいよね！ 元の世界がどんな世界かは知らないけど、しっかりやりなさいよね！」

才人の良く知っているルイズの言い方だ。

元のルイズに戻ってくれた。

「ああ、もちろんさ」

才人は微笑んで答えた。

もうすぐ昼だ。

才人の送別パーティーが、ヴェストリの広場で開かれることになった。

この広場での決闘……それぞれの名誉をかけて戦ったあの決闘も、今はほろ苦く、懐かしい。

才人は、マルトーの計らいで、「主賓が手伝うなんておかしいだろ、準備は俺たちがしとくから」と、ルイズたちに挨拶に行かせてもらえた。

戻ってきた時には、準備は終わっていた。

会場の隅、マルトーの前で、よそ行きの顔をしたルイズ、ギーシュ、キュルケが並んでいる。

しかし、着ているのはよそ行きの服ではない。かつて平民が着ていたものと変わらない、普通の服だ。

これでも彼らには一張羅なのだ。

かつて着ていたきらびやかなドレス、礼服などは、夢のまた夢の彼方に消え去ってしまった。

「……私たち、本当に大バカです……」

「今まで……すいませんでした……僕……恥ずかしくて」

「申し訳ありませんでした。権力をかさに、好き勝手なことばかりして……」

3人は深く頭を下げた。

「……謝ったって、しょうがねえよ。過ぎたことはもうどうにもならねえ」

マルトーは怒るでもなく、ため息混じりに言う。ルイズたちは返す言葉がなくなってしまった。

「オーナー、こいつらは、もう十分苦しみました。許してやって下さい、とは言いません。でもせめて、パーティーには入れてやって下さい。俺はもう、明日にはここにいない人間なんです」

才人が説得する。

マルトーはしばらく黙っていたが、ふと口を開いた。

「……よく考えてみれば……俺、閉校式の時は言い過ぎた。お前らが貴族だった時は何も言えなかつたくせに、貴族じゃなくなった途端に、あんな言い草は……汚いよな。そんなに貴族が嫌なら、さっさとやめて独立すれば良かったんだ。給料がいいのに甘んじて、独立する勇気もなくて……貴族から給料をもらってる身分だつたくせに、卑怯な真似をして悪かつた」

突然のマルトーの謝罪に、3人は驚いた。

「そうだ、俺たちは卑怯だつた。お前らが貴族じゃなくなつたからつて、手の平を返して意地悪をするなんて……それは謝らないといけないな。すまなかつた」

才人も謝る。

「私も卑怯でした。大事な仕事を放り出すのは、いけないことでしたね……すみませんでした」

今度はシエスタが謝った。

「仕事をして欲しかったらチップをよこせなんて、あんな仕返しは汚いわね。ごめんなさい」

「すまなかつた、飯が作れないなら生で食べなんて」

続いてメイド（今はウェイトレス）やコックなど、かつての使用人

たちが謝った。

「いいえ、あの程度で済めば御の字も御の字です！」

「最悪、命さえも……」と思っっていました」

「何もかも失って、初めて平民の気持ちがありました。私たちがしていたことも……」

それから双方、しばらく沈黙が続いた。

自分たちがしてきたことの、反省の沈黙だ。

「……みんな、もうやめにしよう。平民も貴族もここにはいないんだ」

才人の言葉に、一同は大きく頷いた。

元貴族と元平民の反目が、一つ終わった。

和解が、一つ生まれた。

送別会が始まった。

マルトーが乾杯の音頭を取った。

「それでは、サイトの帰還、そして前途を祝して、乾杯！」

「かんぱーい！！」

外に出されたテーブルには、豪勢な料理が並んでいる。

「おいしい！ こんな贅沢な食事は久しぶりだわ！」

ルイズはがつつくように食べる。貴族だった頃の優雅な食べ方とはほど遠い。

「改めて私たち、大バカだってわかったわ」

「当たり前前に食べていた食事のありがたさが良くわかったよ」

キュルケ、ギーシュも同様に、本当に美味しそうに食べた。

才人も、周りの人間も、嘲笑いはしなかった。

「そうだろ？ 今だからわかるだろ？ どんどん食べ。おっと、俺も食わなきゃな。自分の分がなくなっちまう」

才人は後を追うように食べ始めた。

宴もたけなわとなり、才人のスピーチとなった。

「えー、皆さん。短い間だったけど、本当にありがとうございました。俺、いつぱい悩んだ末に、元の世界に帰ることに決めました。

突然こちらの世界にやってきて、わけのわからないまま使い魔にされて、元の世界に帰りたくてしようがなかった。一人で何度泣いたことでしょうか。シエスタやオーナー、それに今の店員のみんなに励まされなかつたら、俺はどうなっていたかわかりません」

ルイズは、自分のしてきたことを思い出し、真っ赤になって下を向いていた。穴があつたら入りたい気持ちだった。

ギーシュも、キュルケも同じだった。本当に恥ずかしいことをしてしまった。

「でも、こちらでたくさんの方々に会えました。俺を導いてくれた人にも会えました。みんな、いい人たちでした。こんなことを言うのは変だけど、今まで生きてきた中で、一番輝いていた時期だったのかも知れません。魔法がなくなつて、貴族制度もなくなつて俺は自由になれました。しかし、もう元の世界には帰れない……でも、不思議と絶望は、そんなにしませんでした。ここに一生、骨を埋めることになつてもいいと、心のどこかで思っていたからかも知れません」

そこで才人は一息ついて、さらに話し続けた。

「でも、思わぬ形で帰れるチャンスがやってきました。俺、悩みました。もう、みんなには会えない、でも、元の世界を捨てることもできない……悩んで悩んで悩んだ末、元の世界に帰ることに決めました。それが、俺の決めた道です。これからは、もう貴族だったことも、平民だったことも関係ありません。それぞれが、それぞれの自分の信じた道を歩いていくんです。俺も、自分の信じた道を歩いていきます。元の世界に戻つても、皆さんのことは決して忘れませ

ん。ご静聴ありがとうございます」
拍手は、しばらく鳴り止まなかった。

誰が伝えたか、送別会には来賓が多数訪れていた。

才人は来賓に挨拶をして回った。

「オールド・オスマンも来てらしたんですね」

「ああ、廃校になってから、養老院で無気力な毎日を送っている。もう、あの世に行ってしまったてもいいと思っていた。そんな時、開拓で生徒たちががんばっていると聞いて、わしは自分が恥ずかしくなった。『このままでいいのか』と自問自答を続けた。そして、気づいたんじゃよ。やはり、わしは教育をあきらめきれないと」

「そうですか……」

「なあ、今度はどんな学校、作るうかのう？ 魔法の代わりに、そうじゃな……読み書きそろばんを、誰でも学べる学校を作るうか？」

「オールド・オスマン、あなたならできます。魔法学院以上に素晴らしい学校、作って下さい！」

「ありがとう。隠居暮らしはもう終わりにして、さあ、始めるか」

「アニエスさんも、開拓を始めたんですか」

「ああ、軍人一筋で今までやってきたが、仕えていた陛下を裏切ってしまった以上、これ以上軍人は続けられない。軍を除隊して、開拓民になったってわけだ。最初は大変だったが、慣れれば結構楽しいんだ」

「しかし、アンリエッタ様に降伏勧告をするなんて……下手すりゃそこで首をはねられてたかも知れませんか」

「覚悟の上だったよ。……しかし、お前はすごいよ。私のしごきに、

良くついてきた。またとない人材だ。素晴らしい教え子を持って誇りに思うよ」

「数々のご指導、ご鞭撻、ありがとございました、師匠！」

「アンリエッタ様!？」

「うふふ、来ちゃいました」

「いいんですか？ お忍びとはいえ、バレたらえらいことですよ」

「何とかありますよ。でも……もう……会えないのですね」

「……」

「サイトさん、あなたがいた元の世界も、こんな風に美しいですか?」

「ええ。美しいですよ」

「そうでしょうね。それはあなたから感じられますもの。あなたに会えて、本当に良かったです」

「光栄でございます、女王陛下！」

「うふふ、やめましょう。今日は私はただの客の一人ですわ」

「そうですね。ははは」

「テファ……来てくれたのはいいけど、子供たちはいいの？」

「うん、お留守番してもらってるから。みんな、しっかりしてるし」

「そうか……俺、テファはハーフェルフだから、どんな目にあってるか心配だったんだ」

「サイト……」

「でも、みんな変わらず接してくれてるって聞いて、安心したよ」

「うん」

「フーケ……じゃない、マチルダ姉さんのことは……大変だったな」

「確かに……でも待つわ。姉さんが帰ってくるまで」
「早く帰ってきてくれるといいな」

その他、来賓への挨拶が一通り終わったところで、

「サイトさん！」

シエスタが、箱を持って声をかけてきた。

「これは？」

「曾祖父の遺骨です。この前、休暇を取って実家に帰っていたのは、これをサイトさんに渡すためだったんです。サイトさんの故郷は、曾祖父の故郷でもありますから……どうか、一緒に元の世界に返してあげて下さい。こちらに残す分と、サイトさんに渡す分、半分に分骨しました」

「そうか、そういうわけだったんだ。わかった、確かに預かったぞ。責任を持って、ひいじいさんの親族に届けるよ」

「お願いします！」

続いてタバサが声をかけてきた。

「サイト……私も……サイトのこと、ずっと好きだった」

「タバサ……」

「でも、あきらめた。だって、サイトにはシエスタがいるもの」

「気の毒したな、タバサ」

「ううん、これでいい……でもお願い、せめて私のこと、忘れないで」

「もちろんさ。決して忘れるもんか」

あつという間に時は流れ、日はとっぷりと暮れた。既に月も出ている。

「それでは、そろそろお開きの時間となりました。そして、いよいよお別れの時が来ました」

コルベールが閉会の宣言をする。

「とうとう、この時が来ちまったな……ルイズ！」

突然、才人は跪いた。みんなが驚く。

「サイト!？」

「……たとえ一日でも、どんな因縁があっても、あなたは私のマスターです。マスター、お願いがあります」

「な、何? 言ってみて」

「これからは、どんなことがあっても絶対に逃げ出さない……と約束して下さい。たとえどんなに辛くても、苦しくても。それが、使い魔だった男の、最後のお願いです」

「う、うん! 私、約束する!! 私、もう逃げない! 絶対に逃げないから! 私……サイトのことが好きだった。メイジと使い魔とか、貴族と平民とかなんて関係なく」

「ルイズ……」

才人は立ち上がった。

「トリステインを、いい国にしてくれよな! 俺、信じてる。トリステインを生まれ変わらせてくれるって。……それじゃ、いつまでも名残は尽きないけれど……お集まりの皆さん、ありがとうございしました!! 皆さんのことは、決して、決して忘れません」

目には涙が浮かんでいる。

「サイト、ありがとう! 嘘じゃないから! みんな本気で思ってる。サイト、ありがとうって!」

ルイズも涙ながらに叫んだ。

「我々に新しい生き甲斐をくれた君こそ、本当のイーヴァルディだ」
「ありがとう、サイト!」

「サイトさん、ありがとうございました!!」

才人に感謝の言葉が次々にかかる。泣き出した者も多かった。

「皆さん……本当に、これで……これで……お別れです……」

才人は世界扉の魔法を使うため、みんなから離れたところへ移動した。

世界扉……使用するにはかなりの精神力が伴い、術者のすべての精神力を使うほどの魔法だという。

才人は目を閉じた。

「……ユル・イル・ナウ……!?!」

「やっぱり嫌! 別れるの嫌! サイトさん、私も連れてって!!」

呪文の詠唱の途中で、シエスタが、たまらず才人に抱きついた。

しかし、才人は静かに引き離れた。

「何言ってるんだよ、忘れたのか? もう俺への気持ちは吹っ切ったんだろ」

「でも……」

「聞き分けのないこと……言わないでくれよ」

才人の悲しそうな目に、シエスタは何も言えなくなった。

「……本当に好きだったよ、シエスタ……」

その時、左手のルーンが光った。

「もう時間がない……さあ、みんなのところへ戻るんだ」

静かに促され、シエスタは戻っていった。

それを見届け、才人は再び詠唱を始める。

元の世界……日本を思い浮かべながら。

「ユル・イル・ナウシズ・ゲーボ・シル・マリ・ハガス・エオル・ペオース……」

唱え終わった時、目の前に大きな鏡が現れた。

荷物を持ち、鏡に向かって才人は歩を進めた。

荷物の中には、シエスタから預かった遺骨もある。

「さようならー!!」

「サイトー、さようならー!!」

「サイトさーん!!」

みんなの悲鳴にも似た叫び声に、才人は振り向いた。

「ありがとう!! さようならー!!」

精一杯の声で才人は叫んだ。

前に向き直り、次の一步を踏み出した時、才人の身体は鏡の中に吸い込まれた。

「さようならー!! サイト、さようならー!! さようならー!!

! さようならー……」

だんだん意識が遠ざかり、声も遠ざかっていく。

さようなら、みんな……。

さようなら、ハルケギニア……。

この日、ハルケギニアから全ての魔法は消えた。

頬に当たる冷たい風に、才人は我に返った。

「こ、ここは……?」

あたりは暗い。わずかな灯りが灯っている。既に真夜中のようだ。起き上がって見渡すと、周囲は見慣れたビル街だった。

「秋葉原だ……俺、本当に戻ってきたんだ……元の世界に……」

元の世界に戻るという念願は成就した。しかし、すぐに喜ぶ気にはなれなかった。

急に、取り返しのつかないことをしてしまった、と言う後悔の念が沸いてきた。

こらえていた涙が、堰を切って溢れ出した。

「シエスタ!! 俺は君が大好きだったんだ!!」

才人の絶叫が、真夜中のビル街に響いた。

でも、もうそれは空しい叫びだった。

元の世界に戻るといふ道を選んだのは、他でもない自分自身なのだから。

「!？」

涙で潤んだ目に、左手のルーンが変化していくのが映った。

刻まれたルーンが砂のように細かい粒となり、一陣の風に吹かれて飛んで行った。

「消えた……消えちゃった……」

ルーンが吹き飛ばされた後の手の甲には、傷跡一つ残っていないなかった。

「これで……全てが終わったんだ……いや、終わっちゃいなかったな。えっと……佐々木さん。あんた、日本に帰ってきたんだよ」

シエスタの曾祖父……佐々木武雄。彼の遺骨を遺族へ届ける約束をシエスタと交わしたのを思い出した。

「ほら、見るよ。今の東京だよ。まるで外国みたいだろ……」
遺骨が入った箱を持って、才人は立ち上がった。

「さてと……行くか……約束を果たしに」

(11) 訣別

「……平賀さんは、自宅を出たまま行方不明となり、家族から捜索願が出されましたが、今日未明、東京・秋葉原でパトロール中の警察官に無事保護されました。平賀さんは、『何かのショックで記憶を失い、気がついたら秋葉原に戻っていた』と話しています。この件で警察は平賀さんから詳しく話を聞く方針です。次のニュースです……」

驚いた。

デルフリンガーの口癖がうつったか、「おでれーた！」と思わず才人は発した。

1年あまり日本を留守にしていたはずなのに、戻ってみれば3ヶ月ほどしかたっていないかった。

そうか、ハルケギニアとこっちとでは、時間の流れが違うんだ。

向こうの1日と、こっちの1日は違うんだな。あつちは地球じゃないんだから。

理屈は簡単だった。

警察の事情聴取を受け、詳しいことはまた後日ということになった。家に帰ると、才人の母がおかんむりになって待ち構えていた。

「今までどこ行ってたのよ」

才人は俯いて黙っていた。「留守してごめん」と言おうとしたが、言葉が出なかった。

「あんたがいなくなつて、どんなに心配したか」

母は、目に涙を浮かべていた。本当にどれだけ心配していたのかは良くわかる。だからこそ怒っているのだ。

「もしかしたら、誘拐されたのかと……」

そこへ、父が顔を出した。

「怒るのはいいが、才人に飯食わせてからにしろ。腹すかしてるだろ。飯の用意が先じゃないのか」

母は黙って台所へ向かうしかなかった。

それから数日後。

「……これで間違いないですね？」

「ええ、そうです」

秋葉原を管轄する万世橋警察署の一室で、才人は再び事情聴取を受けた。

どのようないきさつで行方不明になったか、行方不明になっている間に何をしてきたかを聞かれた。

異世界に飛ばされて、そこで使い魔にされましたとは言えない。言ったところで、一笑に付されるだけだ。

秋葉原を歩いていたら、突然わけがわからなくなった。そこから先の記憶が途切れ途切れではっきりしない。紆余曲折があったようだが良くわからない。そして、気がついたら夜の秋葉原に戻っていた……という話を、それらしくした。

こういう腹芸ができるようになったのも、使い魔の経験のおかげだ。全く、ルイズ様々だ……口には出さなかったが、そう思った。

「で、なんでも、旧日本軍の軍人の子孫に会ったそうだね」

「ええ。その前後の記憶はないんですが、それだけははっきり覚えています。それで……佐々木武雄という人の親族を探してもらえませんか？」

机の上には、シエスタから預かった、分骨された遺骨の入った箱がある。

「この遺骨を、彼の子孫という人から預かったんです。彼の親族に渡して欲しいと……」

警察が調べたところ、海軍少尉、佐々木武雄は終戦間際、戦闘機で出撃したまま行方不明になり、そのまま戦死したものと処理されていたことがわかった。
佐々木の子孫の住所も判明した。
才人は自ら願ひ出て、遺骨を佐々木の子孫に手渡すことにした。

電車で東京から1時間半あまり。

そこは片田舎という言葉が似合う街だった。

「ここか……」

バス停を降りて歩くこと数分。

警察から渡された住所のメモを見る。ここの家で間違いない。

表札には、『佐々木』と書かれている。

才人は玄関のベルを押した。

「ごめん下さい！ 平賀と申します！」

「はい！」

返事がして、すぐに横開きのドアが開いた。

次の瞬間、才人は目を丸くした。

「!?!」

目の前に立っているのは……忘れもしない、あの少女。

「あ、あ、あ……シエスタ!？」

「え？」

少女は呆気にとられる。

「シエスタ! どうして!？」

「い、いえ、違います。私は佐々木静香といますが……」

「う……あ、す、すいません、人違いでした」

シエスタ……ではなかった。

でも本当に瓜二つだ。まるで双子のように。

シエスタよりほんの少し幼い顔立ちだが、背丈はほぼ同じ、黒髪の

おかつぱ頭なのも同じだ。

おそらく、ルイズたちが見ても、間違えるだろう。

「あんたシエスタの妹？ 親戚？」とでも言うだろうか。

「えーと、平賀さん……でしたね。お待ちしておりました、どうぞ」

「は、はい。お邪魔します」

親戚…… そうだ、世界は違っても、シエスタの親戚なのだ。

同じく、佐々木武雄の子孫なのだから。

似ていてもおかしくないが、ここまでそっくりな人間がいるとは思わなかった。

才人はシエスタそっくりの少女、静香に、居間に通された。

居間には佐々木家の人々が勢揃いしていた。

静香の両親、そして祖父。

静香はシエスタと同じ、佐々木の曾孫だった。

「お待ちしていました。平賀さん、何でも私の父の遺骨を持って来られたとかで」

静香の祖父…… 佐々木の息子が最初に言った。

「はい。これがお骨です。実は…… 警察には話していないんですが

…… お父さんの佐々木武雄さんは……」

才人は、警察に話さなかったハルケギニアでの出来事、佐々木の消息を話した。

佐々木は終戦間際に、異世界ハルケギニアに飛ばされたこと。

そこで結婚して子供ができたこと。

日本に帰れないまま、生涯を終えたこと。

自分もハルケギニアに飛ばされたこと。

そこで佐々木の曾孫と親しくなったこと。

そして、分骨された骨の半分は、今もハルケギニアに、愛機の零戦と共にあること。

「信じられないわ、違う世界におじいさんが行っていたなんて」

話し終わると、静香の母がまず第一声を発した。

「そうでしょうね。こんな話、信じられる方が不思議ですよ。だ

から警察には黙っていたんです。剣と魔法の異世界に行っていましたなんて、そんなアニメみたいなこと……どうせ本気にしてくれませんかよ」

「親父が……違う世界ねえ……ニューギニアだんだか知らないけど……」

静香の祖父は物心つく前に父、武雄を戦地へ見送った。

母は終戦直後に死去し、親戚に引き取られて育った。

父の話は、全て親戚から聞いたものだ。

「そこで、結婚して子供を作って、あんたは曾孫に会った……」

祖父はまだ合点がいかないといた顔をしている。

「まあ、信じるしかないだろうねえ……あんたの目を見れば、嘘じゃないってことはわかる」

「おじいちゃん、私も信じる！ 平賀さん、その……ハルケギニアに行つて、ひいおじいちゃんの曾孫に会つたの、本当だと思つよ」

「俺も信じるよ。親父、平賀さんは嘘なんかついてないさ」

「私も信じますよ。ね、お義父さん」

静香と両親が言った。

「うん、わかつた。あんたの話、信じるよ」

「ありがとうございます。バカなことを言つなつて怒られるかなつて思つてたんですけど」

「まあ、確かに突拍子もない話だからなあ……とにかく、親父の遺骨が帰ってきてきて何よりですよ」

才人はわかつてもらえてホツとしたが、静香の祖父も同じくホツとした様子だった。

行方不明の父の消息がわかつて、遺骨が届いた。

これで、ようやく自分と父の戦争は終わったのだ。

「親父。近いうちに、じいさんの葬式をやらないとな……でも同期の人たち、もうほとんどいないんだろうなあ……」

静香の父が言う。

「ああ、そつだな……みんな戦死したか、生き残つたのも年で……」

祖父は寂しげにつぶやいた。

「あの、その時には、参列してもいいですか？」
才人が口を挟んだ。

「ええ、もちろん。是非来て下さい。あなたのおかげで、祖父は帰れたんですから。その時にはお知らせします」

静香の父が言った。祖父も頷いている。

色々とハルケギニアでの出来事を話しているうちに、日はとっぷりと暮れていた。

帰りの時間となった。

「平賀さん、本当に、ありがとうございます。日本に帰れて、父は満足だと思います」

「いえ、僕はただ約束を守っただけですから。ははは」
深々と頭を下げる静香の祖父に、才人は照れて笑った。

「お帰りですね。おかまいもできません。あ、静香。平賀さんをバス停まで送ってあげなさい」

静香の母が言った。

「はい。平賀さん、お送りしますね」

「それじゃ、失礼します」

「葬式の時には、また来て下さいね」

静香の両親と祖父に見送られ、才人は佐々木家を後にした。

才人と静香は二人で、バス停まで歩いた。

こうしていると、本当にシエスタと歩いているかのようだ。

「……高校生？」

「ええ、高校1年です」

「俺は2年。しかしまあ、大変なんだよ」

才人はため息まじりに言った。

「久しぶりに学校に行ってみれば、待ってたのは補習だけ。毎日毎日、補習でうんざりさ。行方不明になってたんだから、少しくらい大目に見てくれてもいいのになあ」

3か月休んだ分、放課後に補習を受けることになった。毎日、授業が終わったあとの補習はさすがに疲れる。

「大変ですねえ……」

静香は苦笑いする。

「全くだよ。まあ、留年するよりはいいけど」

才人もつられるように苦笑いした。

「……それで、色々とお話、聞きましたけど……」

今度は静香が話し始めた。

「私、ファンタジーって大好きなんです。剣とか魔法とか、かつこいいなって思っていました。でも実際は、魔法の世界って、そんなファンタジーな世界なんかじゃなかったんですね」

「そうだよ。マンガなんだ、そういう世界は。俺が見てきたのは、貴族が平民を奴隷みたいにこき使って、戦争ばかりのひどい世界だったよ。でも、俺は生きるために奴隷になるしかなかったし、戦うしかなかった。誰が好きでああなるもんか」

才人がどんなひどい目にあっただのか、静香は想像するだけで胸が痛む思いがした。

「それが突然、魔法がなくなつてさ……貴族が平民に仕返しされて、最初はざまあみろって思ったよ。でも今は違う。俺、わかつたんだよ。貴族だって魔法がなくなりゃ、俺たちと同じ、ただの人間なんだつてさ」

静香は黙って聞いている。

「貴族は悪い奴じゃない、敵じゃないつてことも。いや、悪い奴らもいたよ。でもみんながみんな、そんな奴らばかりじゃないんだつて。魔法学院の連中、みんな貴族じゃなくなつたけど、あいつら、

呪いが解けたみたいに優しくなったよ」

「呪い……?」

「うん、魔法っていう呪いだよ。魔法がなくなったから、あいつら、変わったのかも知れないな。そう言えば……昔のゲームで、ラストにこんな台詞があっただけ。『魔法つてのは不思議なもんだな。魔法は、俺たちの生活をより素晴らしくするために生み出されたはずなのに、いつの間にか、逆に魔法に支配されてた』って。ハルケギニアは、まさしくその通りだったな」

「それって、こっちの世界でも言えるかも知れませんか。科学だって、生活を便利にするためのものはずなのに、実際には戦争のために使われる世の中になってしまいましたからね」

「俺も同感だよ。科学か魔法かの違いだけで、結局、人間自身は何も進歩してなかったってことだな。結局、あっちの世界も、こっちの世界も、大して変わらないのかも知れないな……」

話しながら歩いているうちに、バス停に着いた。

「……何だか、堅苦しい話になっちゃいましたね」

「おっと、そうだな」

二人は顔を見合わせて笑った。

「何はともあれ、最後に、元貴族の奴らと本当の友達になれて良かったよ。元の世界に戻るまでもう少し時間があつたら、貴族も平民も関係ない、本当に対等な友達付き合いができただろうな。それがちよっと残念だな」

「今頃、みんなどうしてるんでしょうね。頑張って働いているんでしょうね……」

「ああ、そうだよ。みんな立派に生きてる。もう会えなくても、ハルケギニアでみんな、頑張ってる。俺も頑張らないとな」

やがて、バスが来た。

「それじゃ、ひいじいさんの葬式で、またね」

「はい、失礼します!」

才人が乗ると、バスはすぐに走り出した。

窓の外で、静香が手を振っているのが見える。

「！」

一瞬、メイド服を着たシエスタの姿に見えた。

「……………」

が、すぐに静香の姿に戻った。

…………… さよなら、シエスタ……………

才人は手を振って応えた。

バスは夕暮れの中を、駅へ向けて走っていった。

佐々木の遺骨を渡すという、シエスタとの約束を果たすことができた。

バスの中で夕暮れを眺めながら、才人は考えていた。

6000年続いてきた魔法と訣別したハルケギニアは、これから一体どうなるだろうか。

新しい時代がやってくるのか。

科学が魔法に取って代わるのか。

元貴族と元平民の反目は、いつか終わるだろうか。

今頃は、みんな一生懸命働いているだろうか。

レストラン、ベル・エキップは繁盛しているだろうか。

「16番テーブルのオーダー、全てOK」

「12番のヨシエナヴェ、できましたー！」

「おーし、持ってけー！！ 熱いぞ、気をつけるよー！」

「お待たせしました、ヨシエナヴェでございます」

開拓民となった元貴族たちは、一生懸命作物の世話をしているだろうか。

「葉っぱの色づき、良くなってきたなあ。収穫、期待できそうだな」

「貴族の頃には、味わえなかったわね、こんな気持ち。自分で作っ

た野菜の味って、おいしいかしら」

「私、本当に開拓やって良かったって思ってる。もう貴族だったことなんか忘れちゃうくらい」
みんな忙しそうに、かつ頑張ってる姿が、才人の心の中に浮かんだ。

そして、ハルケギニアでの暮らしと訣別した自分は、前と比べて変われただろうか。それはわからない。

だが、どちらにしても、これからの長い人生を、実りあるものにする努力をしなければならぬ。

それが、ハルケギニアから帰ってきた、自分の義務だ。

駅に着いたバスを降りた後、切符を買ってホームに出た。

ホームには、才人以外誰もいない。

才人はふと夕焼け空を見上げた。

日はすでに没し、一番星が光っている。

三日月も光っている空に、ルイズ、シエスタ、タバサ、キュルケ、ギーシュ、コルベール、オスマン、アニメス、ティファニア、マルト……みんなの笑顔が見えたような気がした。

「おい、ハルケギニアのみんなー！！ バイバーイー！！」

これ以上出せない、精一杯の声で叫んだ。

こうして時は過ぎていく。

たとえどんな大きな出来事があったとしても、それが終わった後には、何もなかったかのごとく。

さらば、魔法。

さらば、戦いの日々。

さらば、ハルケギニア。

そして、ハルケギニアと、この地球の全ての人々に……。
幸よ、来たれ！！

愛だけで二人寄りそって生きてゆくには
あまりにも違い過ぎてたね 求める未来

出会った日から 俺の夢だけ抱きしめ
あんなにきれいだった 君の笑顔はこわれた

DON'T FORGET YOU
君がいて ずっと強く戦っていた

DON'T FORGET YOU
喜んだ顔を見たくて走りつづけた
ただ幸せを与えたかった

一言も俺を責めないでやさしくしてくれた
知らぬ間に束縛していたとやっと気づいたよ

別々の場所で冬をむかえる頃には
輝くあの笑顔が戻っていることを願ってる

DON'T FORGET YOU
心から愛し合ったことは嘘じゃない

DON'T FORGET YOU
どれだけの季節が流れても君だけは
忘れられない大切な人

DON'T FORGET YOU
君がいて ずっと強く戦っていった

DON'T FORGET YOU
喜んだ顔を見たくて走りつづけた
ただ幸せを与えたかった

『DON'T FORGET YOU』 by TWINZER

THE END

(11) 訣別(後書き)

『ハレルヤ！ 魔法が消える日』。物語はこれで幕を閉じました。これからハルケギニアはどんな世界になっていくのか、それは皆さんの想像におまかせするとしましょう。

「ゼロの使い魔の二次創作で、貴族がだめになる話を書こう」と、思ったのは、ゼロの使い魔に出てくる貴族のあまりのひどさに憤慨したからでした。平民をまるで虫ケラみたいに扱う、見返りなしで平民を助けたことなど、一度もない。

才人はルイズの使い魔として突然召喚され、下男同様にこき使われて聞くも涙、語るも涙。たまに気に食わないことがあればサンドバツグのように殴られる。

他の貴族どもも、善人面して大して変わらない。

魔法が使えなくなれば、貴族はだめになる。もう魔法がなくなったことを知ったら、平民がどうするかは知れたもの。

そんな思いから、まず書いたのが Unhappy End バージョンの『ハレルヤ！ 魔法が消える日 崩壊』でした。

平民の激しい復讐で貴族は破滅する。しかし、今から見ればどうも消化不良で終わってしまいました。

そして、Happy End バージョンの『訣別』です。

予告通り、こちらでは貴族も平民も、一人も死にませんでした。もっとも、書かれていないところで、殺し合いになっていたかも知れませんが、貴族が処刑されていたかも知れませんが、

身分を失った元貴族は平民から虐げられ、迫害されました。落ちぶれて、開拓民になりました。書きながら「ざまあみろ」と思いました。

それでも、最後くらいは許してやるか、もう十分罰は受けたからと、

元貴族の連中に救いの手を差し出してやりました。

私は貴族がだめになる話、落ちぶれる話、平民に復讐される話、もつとたくさん出てくることを望んでいます。

今までなかった話を書いたと自負していますが、私よりもっと上手くて面白い話を書ける人が出てくるのが楽しみです。

最後に、読んで下さった皆様、ありがとうございました。

追伸。「魔法つてのは不思議なもんだな」という台詞は、日本ファルコムの名作RPG、『イース2』のエンディングから引用したものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4446k/>

ハレルヤ！ 魔法が消える日 訣別

2011年1月10日16時21分発行